広島市の文化財　第31集

広島市安芸区矢野町所在

岡谷遺跡
狐が城古墳 発掘調査報告

1985.3

広島市教育委員会

はしがき

広島市の発展にともなって，市街地の拡大がすすみ，周辺の丘陵地域では，宅地造成等の開発がすすんでいます。

広島市安芸区矢野町は，古くから交通の要衝として発達したところであり，また，遺跡の多いところとしてもよく知られている地域です。今回，宅地造成が行われることになり，発掘調査した岡谷遺跡・狐が城古墳も，広島湾に向ってのびる丘陵上に発見されたものです。

発掘調査は，広島市教育委員会が行いました。その結果，はにわ片の出土など，広島市にとっては貴重な資料が得られ，大きな成果をおさめることができました。また，地元のみなさんの関心が高く，多くの方々の協力を得られました。

この報告書が，市民の方々の歴史学習や，郷土理解のために役立てば幸いです。

おわりに，今回の調査にあたり，ご指導いただいた諸先生および作業にあたっていただいた方々に厚くお礼申しあげます。

昭和60年3月

広島市教育長　藤井　尚

例　　言

1. 本書は，広島市安芸区矢野町字岡谷及び字狐が城における土地区画整理事業に伴い，昭和59年5月14日から10月18日までの間，実施した岡谷遺跡・狐が城古墳の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は，広島市矢野土地区画整理組合設立準備委員会から委託を受けて広島市教育委員会が実施した。

3. 本書は，Ⅲ・3，Ⅳ・3を阿部　滋，そのほかを岡野幸夫が執筆し，阿部が編集した。

4. 本書掲載の航空写真は，スタジオ・ユニに委託した。

5. 第1図は，建設省国土地理院発行50,000分の1，海田市・安浦の地形図を複製したものである。

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 3

Ⅲ　岡谷遺跡

1. 遺　　構 …… 6

2. 遺　　物 …… 12

3. ま と め …… 20

Ⅳ　狐が城古墳

1. 遺　　構 …… 24

2. 遺　　物 …… 28

3. ま と め …… 33

挿　図　目　次

第 1 図　両遺跡の位置と周辺の主要な遺跡
第 2 図　矢野町高下谷出土の弥生土器実測図及び丸古古墳出土の仿製内行花文鏡拓影
第 3 図　岡谷遺跡周辺地形図及び遺構配置図
第 4 図　第1号竪穴式住居跡平面実測図
第 5 図　第1号竪穴式住居跡断面実測図
第 6 図　第2号竪穴式住居跡平面実測図
第 7 図　第2号竪穴式住居跡断面実測図
第 8 図　壷棺出土状態実測図
第 9 図　土壙実測図
第10図　竪穴式住居跡内出土土器実測図(1)
第11図　竪穴式住居跡内出土土器実測図(2)
第12図　土壙内出土土器実測図(1)
第13図　土壙内出土土器実測図(2)
第14図　第2号竪穴式住居跡内出土土製品実測図
第15図　第2号竪穴式住居跡内出土砥石実測図
第16図　狐が城古墳地形測量図及び遺構配置図
第17図　石列1実測図
第18図　石列2実測図
第19図　石列3実測図
第20図　石棺実測図
第21図　狐が城古墳出土円筒埴輪実測図(1)
第22図　狐が城古墳出土円筒埴輪実測図(2)
第23図　狐が城古墳出土形象埴輪及び高坏形土器実側図

図　版　目　次

図版　1　a. 岡谷遺跡遠景（航空写真）
　　b. 岡谷遺跡全景（航空写真）
図版　2　a. 岡谷遺跡全景（調査前・南から）
　　b. 同　上　（調査後・南から）
図版　3　a. 岡谷遺跡第1号竪穴式住居跡（西から）
　　b. 同　上　（南から）
図版　4　a. 岡谷遺跡第2号竪穴式住居跡（西から）
　　b. 同　上　（北から）
図版　5　a. 岡谷遺跡第2号竪穴式住居跡内土器出土状況
　　b. 岡谷遺跡壷棺出土状況
図版　6　a. 岡谷遺跡土壙（西から）
　　b. 同　上　（東から）
図版　7　a. 狐が城古墳近景（航空写真）
　　b. 狐が城古墳全景（航空写真）
図版　8　a. 狐が城古墳全景（調査前・西から）
　　b. 同　上　（調査後・西から）
図版　9　a. 狐が城古墳石列1（東から）
　　b. 同　上　（西から）
図版 10　a. 狐が城古墳石列1（北から）
　　b. 狐が城古墳石列1上埴輪出土状況
図版 11　a. 狐が城古墳石列2（北から）
　　b. 同　上　（東から）
図版 12　a. 狐が城古墳石列3（西から）
　　b. 同　上　（北から）
図版 13　a. 狐が城古墳西側埴輪出土状況
　　b. 狐が城古墳西側形象埴輪及び高坏形土器出土状況
図版 14　a. 狐が城古墳西側斜面（調査後・南から）
　　b. 狐が城古墳石棺（完掘後）
図版 15　a. 岡谷遺跡第2号竪穴式住居跡内出土土器(1)
図版 16　岡谷遺跡第2号竪穴式住居跡内出土土器(2)
図版 17　岡谷遺跡土壙内出土土器
図版 18　a. 岡谷遺跡第2号竪穴式住居跡内出土土製品（実大）
　　b. 岡谷遺跡第2号竪穴式住居跡内出土砥石及び調査区内出土土器
図版 19　狐が城古墳出土円筒埴輪(1)
図版 20　a. 狐が城古墳出土円筒埴輪(2)
　　b. 狐が城古墳出土形象埴輪及び高坏形土器

Ⅰ　はじめに

広島市教育委員会では，昭和56年8月に広島市安芸区矢野町の造成計画を知り，分布調査を行った結果，埋蔵文化財の存在を確認した。そこで，造成主である広島市矢野土地区画整理組合設立準備委員会と，施工主である株式会社間組と遺跡の取り扱いについて再三協議を重ねたが，地理的条件等から設計変更は不可能であり，記録保存を図ることもやむなしとの結論に達した。これを受けて，広島市教育委員会では，昭和59年4月から発掘調査の準備にかかり，5月14日に調査を開始し，10月18日に終了した。

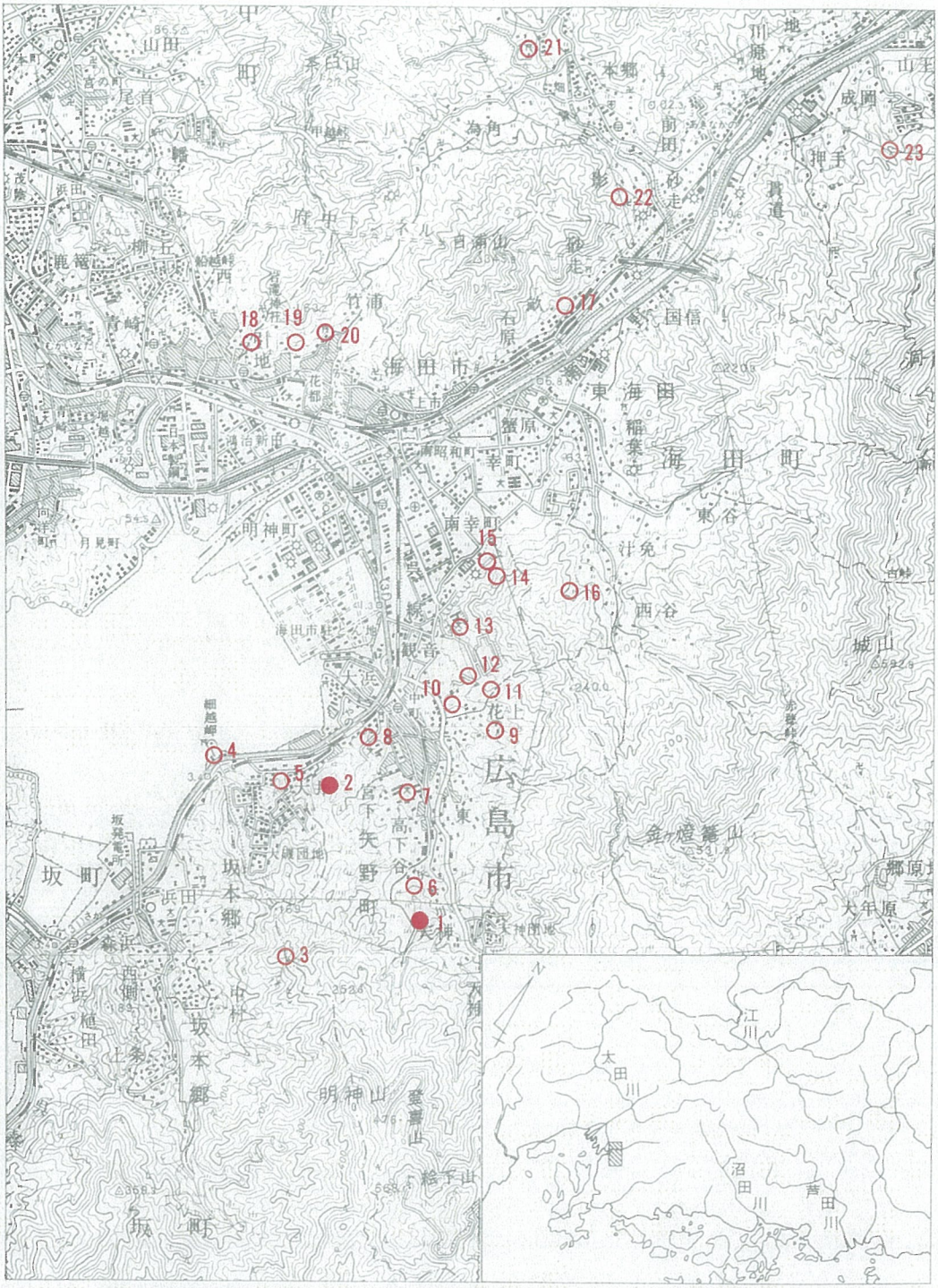
なお，調査の関係者は下記のとおりである。

調査委託者　　広島市矢野土地区画整理組合設立準備委員会
調査主体　　広島市教育委員会
調査担当係　　広島市教育委員会社会教育部管理課文化財係
調査関係者　　森脇昭之（社会教育部長）
　　上川孝明（管理課長）
　　木原　亮（管理課課長補佐兼文化財係長）
　　桧垣栄次（管理課文化財係主査）
調査者　　阿部　滋（管理課文化財係主事）
　　岡野幸夫（管理課文化財係主事）

調査補助員（順不同）

発掘作業　　伊藤逸二，大杉春夫，大田ハナコ，大津次義，川中福一，河原薫，高下惣次，小林嵬，坂橋春三，里村末一，竹本美恵子，田村トシコ，天畠実一，中井重夫，中村義行，畠山重行，畠山繁義，羽田茂，花岡甫，花房サトミ，浜尾正樹，平木茂三，藤井八重子，藤本光雄，丸中佳子
整理作業　　河合淳子，住川香代子，鼓智子，橋本礼子

また，広島市矢野土地区画整理組合設立準備委員会，株式会社間組，矢野公民館，発喜会ほか多くの方々には，調査を円滑に進めるために多大なご配慮，ご援助をたまわった。さらに，報告書作成にあたっては，広島大学考古学研究室，奈良大学，国学院大学，橿原考古学研究所，東京国立博物館，広島県立埋蔵文化財センター，(財)広島県埋蔵文化財調査センターの方々から広範な教示を得た。ここに記して謝意を表わしたい。



1．岡谷遺跡，　2．狐が城古墳，　3．茶臼山古墳，　4．細越古墳群，　5．龍田山古墳，　6．高下谷遺跡，
7．矢野小学校校庭遺跡，　8．宮脇古墳，　9．梶木貝塚，　10．西尾古墳，　11．丸古古墳，　12．北尾古墳，
13．神森古墳群，　14．千古古墳，　15．千古下古墳，　16．西谷古墳群，　17．畝観音免古墳群，　18．片山遺跡，
19．岩滝山古墳，　20．新宮古墳，　21．中須賀神社境内遺跡，　22．こもり塚古墳群，　23．山王貝塚

第1図　両遺跡の位置と周辺の主要な遺跡

II 位置と環境

岡谷（おかのたに）遺跡・狐が城古墳の所在する広島市安芸区矢野町は，広島市の南東部に位置しており，広島湾の内湾にあたる海田湾に面した湾岸地域の一つである。南部にそびえる標高568.8 mの絵下山をはじめとする山陵が屏風状に三方を囲む町域は，南北約5.6 km，東西約3 kmを測る南北に長い地形を呈している。町のほとんどを占める山地及び丘陵は，山頂から標高200 mあたりにかけて急峻で，それ以下はしだいに傾斜が緩やかになる。このため，低地はわずかに矢野川・宮下川流域に形成された沖積地に見られる程度にとどまる。矢野町域が概ね現在の地形に至ったのは，江戸時代に入って西崎新開・宮崎新開等の新田開発が盛んに行われ，海田湾の埋め立てが進んだ結果によるもので(注1)，現在よりも海岸線が奥に入っていたと推定される往古においては，この沖積地も極めて狭小なものだったであろう。

矢野の主水系は，絵下山東側の渓谷に源を発する矢野川と蔭野谷に源を発する宮下川に代表され，東西に分かれて各々支流を合わせつつ高下谷付近から町の中央部をほぼ並行して海田湾に流入している。両水系は，川幅も狭く，平時の流水量も極めて少量である。しかし，昭和20年の枕崎台風時の大洪水に見られるように，ある程度治水・灌漑技術の進歩した状況下でさえ，自然をコントロールすることは困難なようであった(注2)。それにもまして，土木技術の未熟な原始・古代において，この両水系は氾濫を繰り返し，流域はしばしば決潰したことであろう。このことから，矢野地域の可耕地は非常に不安定かつ狭小であったと考えられよう。

さて，歴史は少し下るが，平安期に著わされた『類聚国史』巻83に「安芸国は土地墝薄にして其の田は下々，百姓の農作未だ盈儲有らざる也……。」と記されている点などは，前述の裏付けとなるものであろう。しかし，同じく平安期の『和名類聚抄』によれば，安芸郡には11郷が置かれ，その中に見られる養隈郷（也乃）が当時農業生産基盤の薄弱であったと考えられる矢野に比定されている点を考え合わせた時，この地域の人々が，遠浅で波も比較的穏やかな海田湾を，往古より良好な漁場として広く活用したことは想像に難くない。

また，海上交通は古来より文化の伝播路や物資の運搬路として重要な位置を占めており，海田湾に面する養隈郷が，海上交通の重要な拠点であったと考えることもできよう。ふり返って古墳時代をみると，耕作に適する土地が少ない町域において，確認されている古墳の大部分が眼前に広がる海田湾沿岸の丘陵先端付近に見出されることから，古墳時代においてもこの地域が海と緊密な関係を持っていたことを物語るものであろう。今回調査した狐が城古墳も，またこうした立地を持つ古墳の一つである。

次に，矢野町及び周辺部の遺跡について触れてみよう。

現在のところ弥生時代の遺跡としては，梶木貝塚・西崎貝塚・東畑貝塚等が確認されている。この内，梶木貝塚は昭和15年に調査され，土器片・石庖丁・磨製石斧などが出土し，前期に位置付けられている(注3)。周辺部で同様な時期に比定されている遺跡は，片山遺跡（安芸区船越）がある(注4)。また，矢野町における中期に位置付けられる明確な遺跡は見られないが，高下谷付近から中期の様相を呈する土器片の出土が確認されている（第2図参照）。この他にも，中期～後期のものと考えられる細形銅剣の茎部が絵下谷の河中より発見されたと伝えられている(注5)。さらに，後期に比定されている西崎貝塚からは，土器片・石斧・紡錘車・猪牙製のピンが出土しており(注6)，東畑貝塚も同様な時期とされているが，詳細は明らかでない。周辺部では，中須賀神社境内遺跡・蓮華寺山頂遺跡（安芸区畑賀）・山王貝塚（安芸区瀬野）などが後期の遺跡として知られている(注7)。

古墳時代に入ると，海田湾沿岸の丘陵先端に確認されている遺跡数も著しく増加する。中でも狐が城古墳が

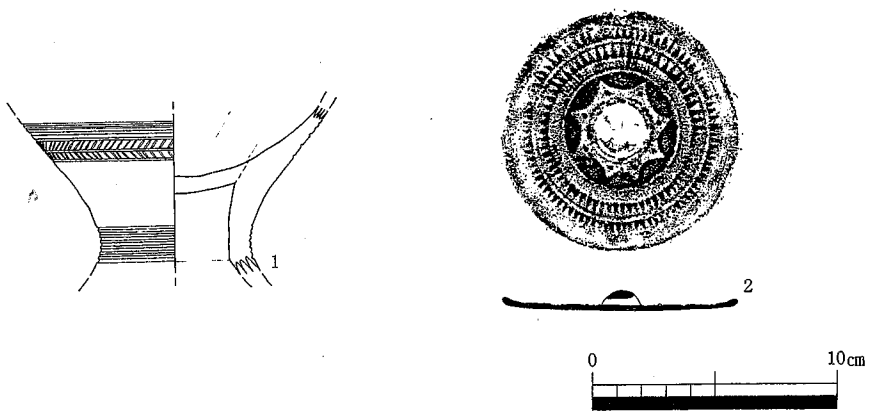
存在する丘陵から矢野川を挟んで北東側の丘陵上には，西尾古墳・丸古古墳・神森古墳群（西崎箱式石棺群）・北尾古墳・千古古墳・千古下古墳など，町域で確認されている過半数以上にのぼる古墳が集中して見られる。この内，竪穴式石室を内部主体に持つ古墳は，土製勾玉・短甲・轡などが出土した西尾古墳と，人骨・仿製の内行花文鏡（第２図参照）などが出土した丸古古墳があり，ともに円筒埴輪を有している。(注8) また，市域でも大型の箱式石棺（第２号一外法 2.1 × 0.6 m，第３号一外法 1.8 × 0.7 m）を含む５基の箱式石棺からなる神森古墳群は，昭和15年に行われた新開埋立工事用の土砂採取時に発見されたもので，第３号石棺より成年男性の人骨及び銅釧が出土している。(注9) 上述の３古墳は，いずれも５世紀代の範疇に属するものとされている。(注10) さらに，北尾古墳からは土師器・須恵器，千古古墳からは人骨片・銅環など，また千古下古墳からは鉄鏃・須恵器などが出土しており，いずれも横穴式石室を有する古墳で６世紀後半に比定されている。(注11) なお，町域では，前述の古墳以外にも，龍田山古墳・細越古墳群・宮脇古墳・茶臼山古墳等が知られているが，詳細は不明である。周辺部においても，翡翠製の勾玉・水晶製の切子玉・銀環などを副葬していた新宮古墳や岩滝山古墳（安芸区船越）(注12)・西谷古墳群・畝観音免古墳群（安芸郡海田町）(注13)・こもり塚古墳群（安芸区畑賀）(注14)など，古墳時代後半期の範疇に位置付けられる古墳が確認されている。

以上のように，矢野町域は，農業生産基盤が薄弱であったものと思われるにもかかわらず，市域でも特筆すべき遺物を出土している遺跡が見られる点を考慮するならば，海との密接な関係を切り離すことのできない地域である。

（注 1）矢野町町史編纂委員会編『広島県矢野町史上巻』1958
（注 2）広島市役所編『新修矢野町史』1979
（注 3）注１に同じ
（注 4）広島市役所編『船越町史』1980
（注 5）注１に同じ
（注 6）注１に同じ
（注 7）広島市役所編『瀬野川町史』1979
（注 8）注１に同じ
（注 9）注１に同じ
（注10）注１に同じ
（注11）注１に同じ
（注12）注４に同じ
（注13）河瀬正利『畝観音免古墳群』1979
（注14）注７に同じ

参考文献

『新修広島市史』第１・２・３巻
『広島県史』考古編



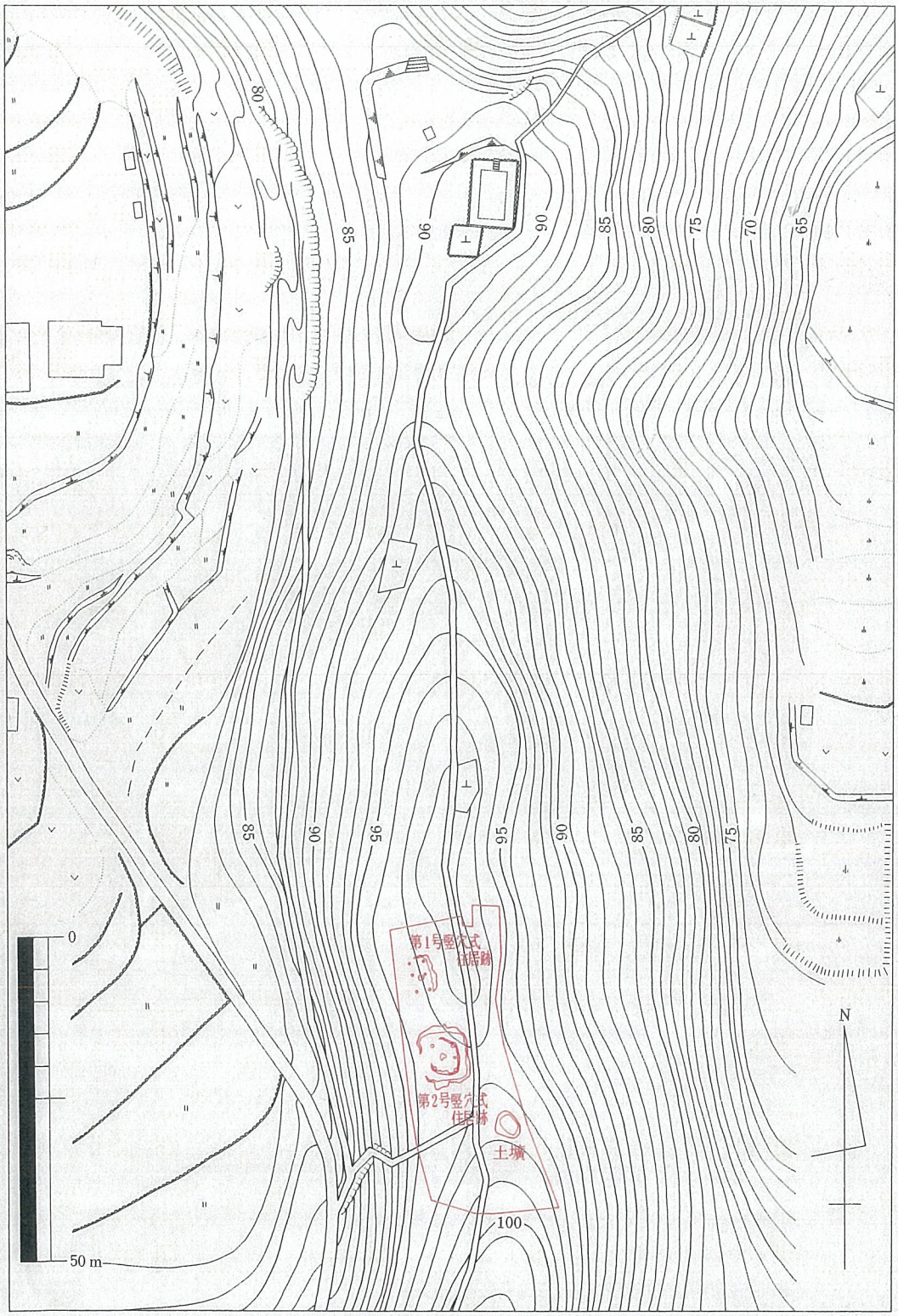
第２図　矢野町宮下谷出土の弥生土器実測図および丸古古墳出土の仿製内行花文鏡拓影

III 岡谷遺跡
（おかのたに）

1．遺　　構 …… 6

2．遺　　物 …… 12

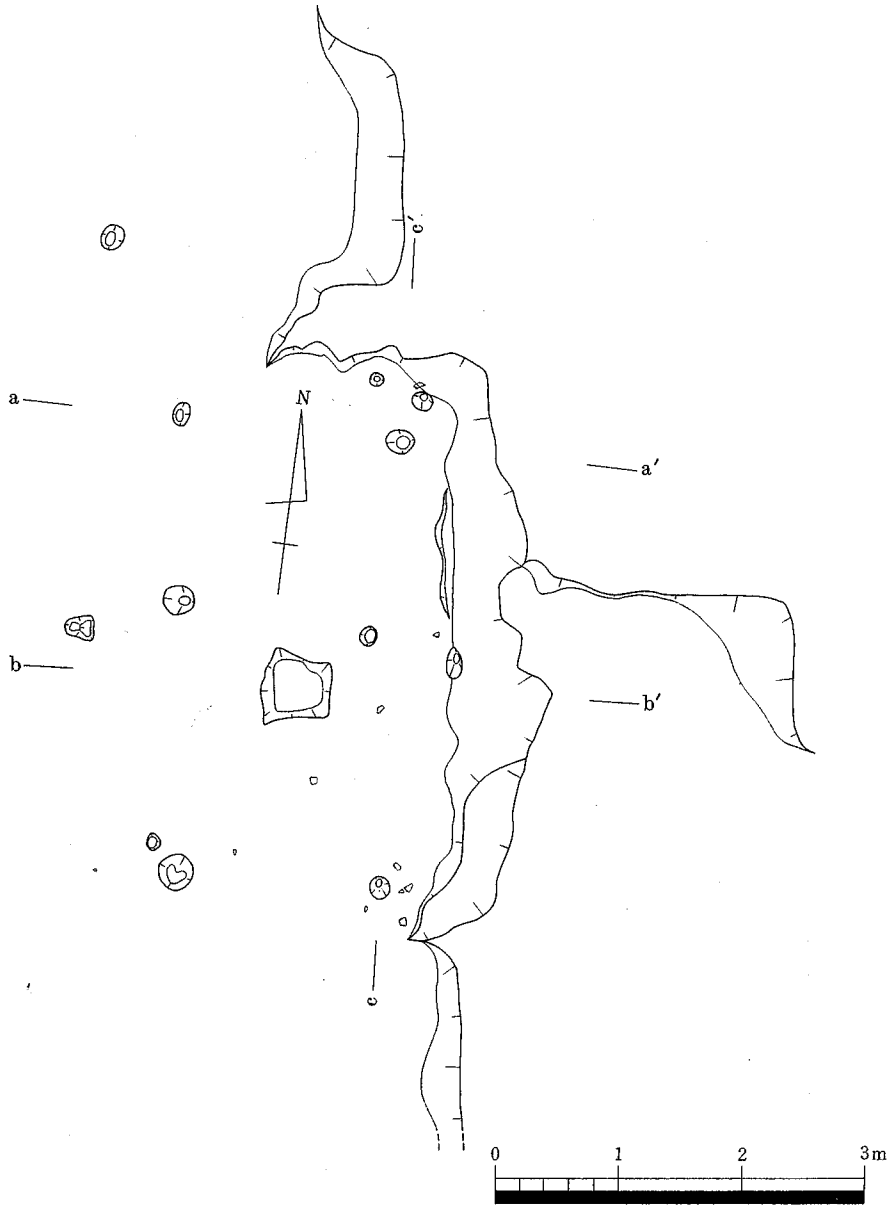
3．ま　と　め …… 20



第３図　岡谷遺跡周辺地形図および遺構配置図

1. 遺　　構

岡谷遺跡は，広島市安芸区矢野町字岡谷に所在しており，標高465.4 mの発喜山から北に派生した丘陵上に位置している。遺跡の標高は95～100 m，付近の水田面からの比高は15～20 mを測る。この丘陵の西側には，狭小な谷田が宮下川に沿って見られる。本遺跡付近の地勢状況は，畑作地及び雑木林で，試掘を実施した結果，集落遺跡であることを確認しており，今回の調査により，竪穴式住居跡2軒，土壙1基を検出した。



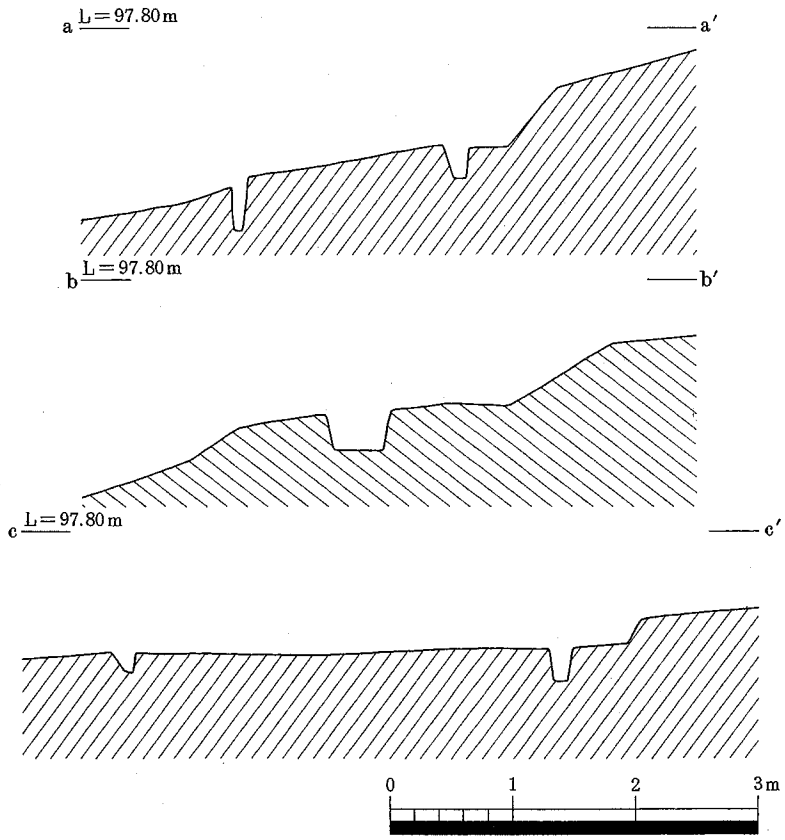
第4図　第1号竪穴式住居跡平面実測図

1. 第1号竪穴式住居跡（第4，5図）

本住居跡は，北にのびる尾根の西側傾斜面に位置する。床面から検出された6カ所のピットは，径15～30㎝，深さ12～42㎝を測り，いずれも小規模で形状のばらつきが著しいが，その配置から柱穴と考えられる。住居跡の規模は，ピットの配置状態や現存する掘り方から，南北4.6m，東西3.9mと推定され，長方形に近い平面プランを呈している。壁高は，東側で最高48㎝を測る。検出された床面は，かなり凹凸が著しく，埋土で整地していたものと思われる。この床面の東側に検出された長さ100㎝，幅10～15㎝，深さ5㎝程度の溝は，周壁沿いに検出されたことや，その形状から，壁溝の一部分と考えられる。また，住居跡の中央付近に検出された方形を呈する掘り込みは，56×48㎝，深さ30㎝を測り，内部にわずかながら炭化物が見られたことから炉跡と考えられる。

遺物は，少量の土器片の他何ら検出されなかった。

なお，住居跡の外側に隣接して東側及び北側で，地山を掘り込んだ平坦面が検出された。この内，北側の平坦面に付随して，径20㎝，深さ35㎝を測るピットが見られた。さらに，双方の平坦面からは，第1号竪穴式住居跡伴出の土器に類似した土器片が出土しており，第1号竪穴式住居跡との関連が示唆されるが断定し得なかった。



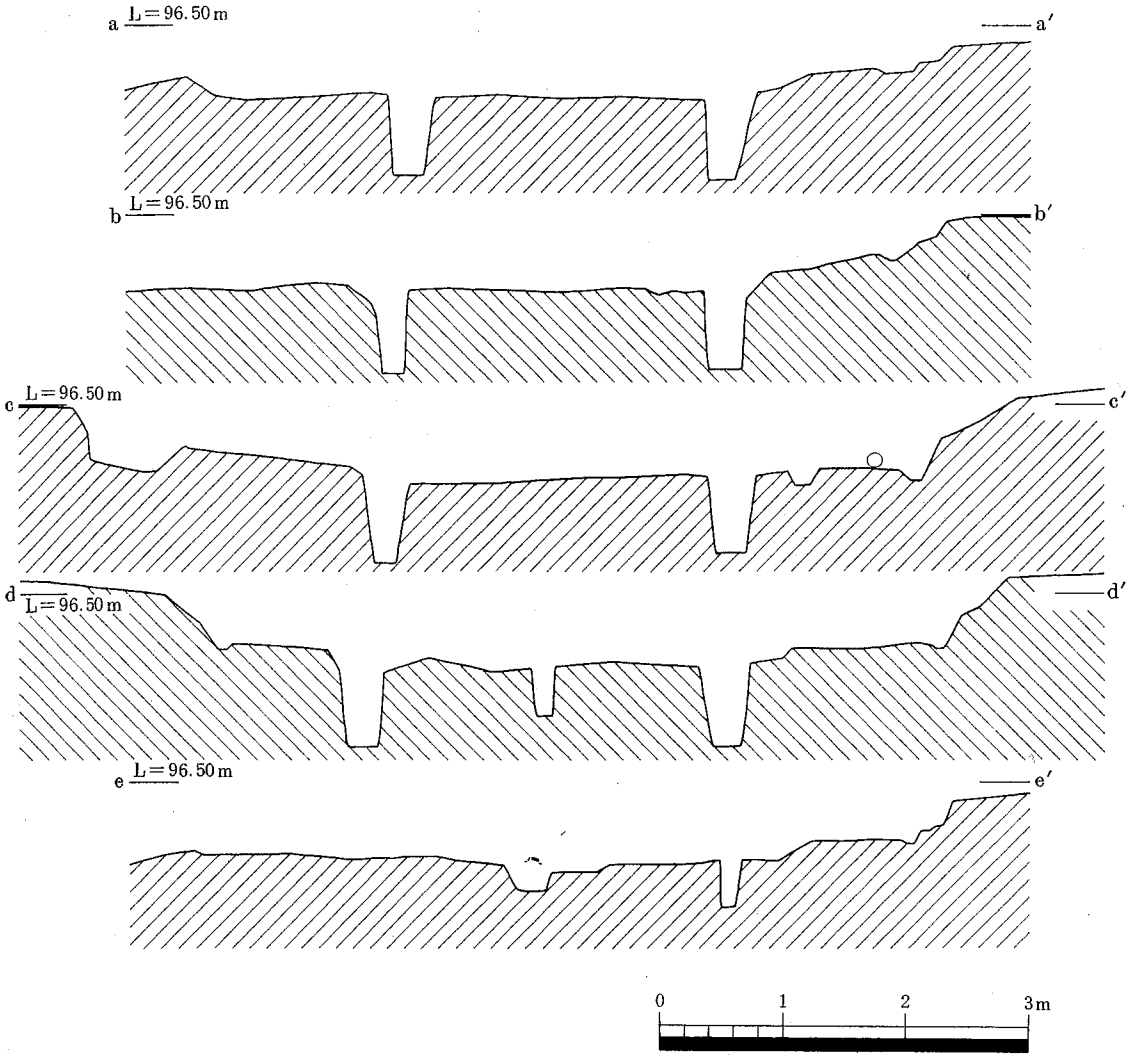
第5図　第1号竪穴式住居跡断面実測図



第６図　第２号竪穴式住居跡平面実測図

2.　第２号竪穴式住居跡（第６，７図）

第１号竪穴式住居跡の南約４ｍに隣接するこの住居跡は，第１号竪穴式住居跡と同様に，尾根線中央よりやや西側寄りの傾斜面から検出された。本住居跡は，南北6.8ｍ，東西6.2ｍを測り，方形に近い平面プランを呈している。壁高は，北側で最高65㎝を測る。壁溝は，西側及び東側一部分を除いて，幅10～20㎝，深さ５～８㎝で巡っており，東側でわずかに２条となる個所が見られる。この部分は，レベル差が10㎝程度あり，建て替えの可能性も想定されるが部分的にしか遺存しておらず断定し得ない。

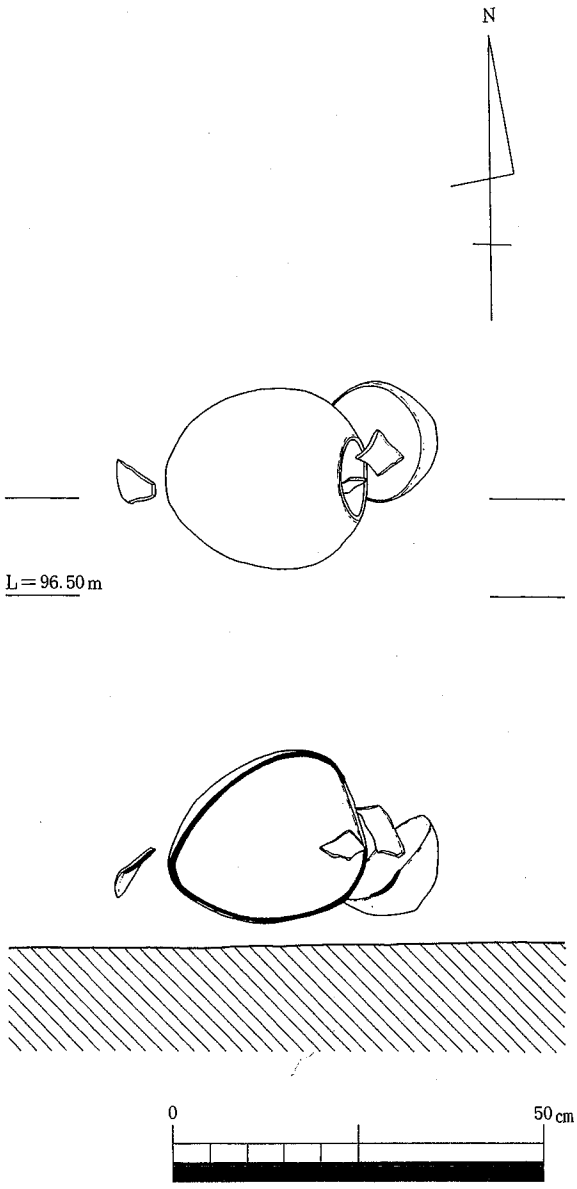


第7図　第2号竪穴式住居跡断面実測図

さて，規模，形態等から柱穴と考えられるピットは5カ所（P_1～P_5）ある。このうちP_1～P_4は，径30～40cm，深さ60～67cmを測り，これらの形状や配置から主柱穴と考えられる。P_1－P_4間に位置するP_5は，径18～21cm，深さ34cmを測り，ピットの形態並びに位置関係より副柱穴と思われる。しかし，P_1－P_4間以外の3辺において，副柱穴と思われるピットは検出されなかった。P_1～P_4の各柱間の距離は，P_1－P_2間256cm，P_2－P_3間280cm，P_3－P_4間272cm，P_4－P_1間296cmを測り，ピットの配置が住居の掘り方に対して若干歪んでいる。

P_1～P_4を囲むように検出された掘り方は，3.6×3.5mを測る方形に近いプランを呈しており，外側の床面よりさらに5～15cm程度低くなっている。中央付近には，深さ20cmを測る不整形の掘り込みが検出され，炭化物を含有した焼土が見られたことから炉跡と考えられる。この焼土内からは，土製品1点も出土している。

南西部からは，住居の掘り方に接して，1.8×0.9m，深さ20～40cmを測る長方形に近い掘り込みを検



第8図　壷棺出土状態実測図

出した。しかしながら，伴出する遺物が全く見られないために，時期，性格，用途などについては明らかでない。

本住居跡の遺物は，周壁沿い及び中央付近からほぼ完形に近い土器が比較的多く見られたほか，多量の土器片や砥石1，鉄片4とともに大小様々な河原石が出土した。この中でほぼ完形に近い土器は，北側の床面直上から甕形土器3点，西側の床面直上から鉢形土器1点，南西側の床面約5cm上方から鉢形土器1点，内側の掘り方床面より約20cm上方から小型の鉢形土器1点などが出土している。さらに，中央の炉跡付近から出土した壷形土器の複合口縁部は，頸部を上にした状態で地山より10～15cm程度浮いており，口縁部以外の部分が見られなかったことから，器台に転用した可能性を想起させる。

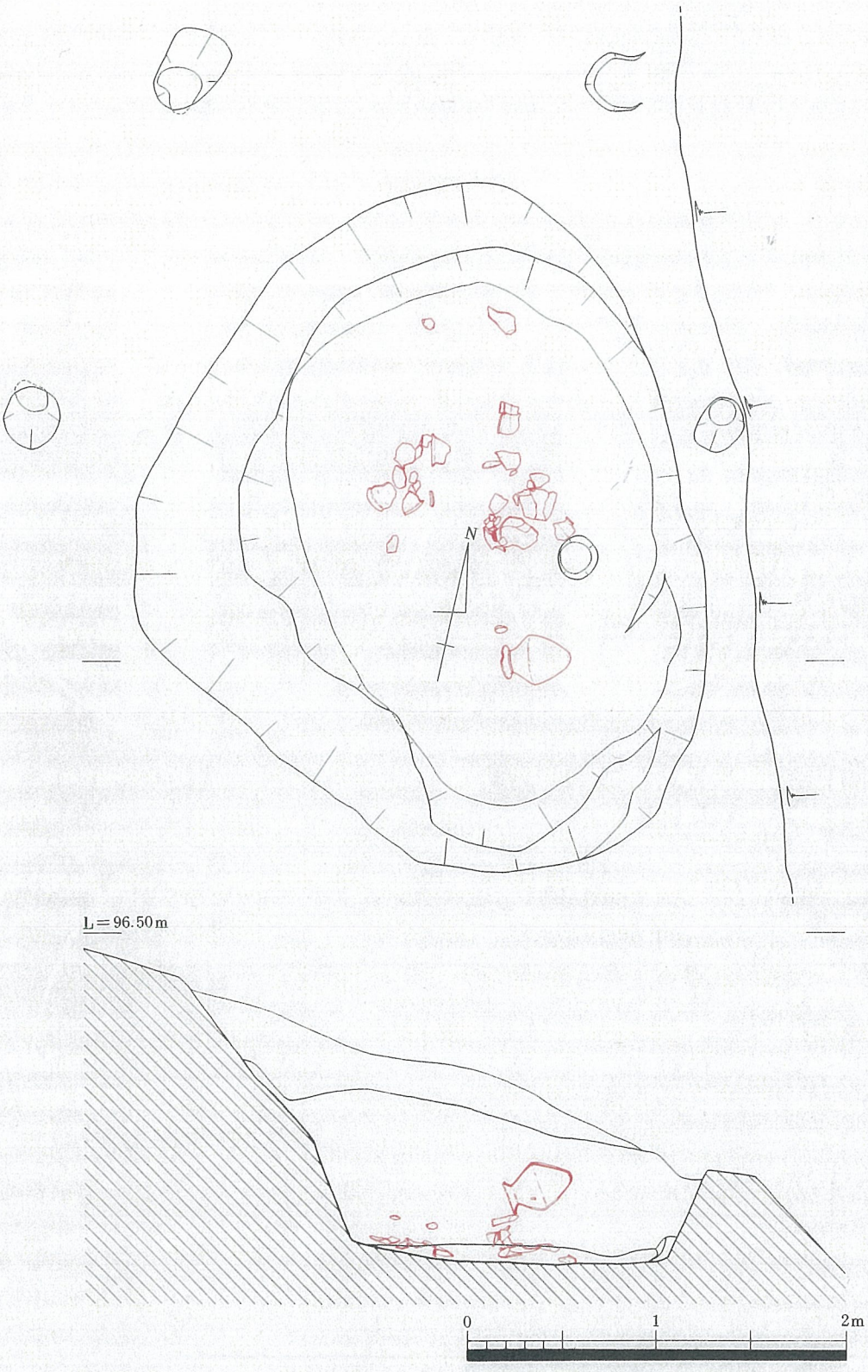
なお，住居跡内北側に集中する土器群に近接して，床面より若干浮いた状態で出土した壷形土器は，蓋のような小型の鉢形土器を伴出している。しかも，この土器は頸部が欠けており，体部に1カ所焼成後の小さな穿孔が見られるなど住居跡内の他の土器に比して，出土状況や形態を異にしている点で特徴的である（第8図）。

3. 土　　壙（第9図）

本土壙は，第2号竪穴式住居跡の南東約6m，尾根線の中央よりやや東寄りの傾斜面に位置している。上縁部は径353×301cmを測る不整円形で底部は径266×191cmを測る長円形に近いプランを呈しており，深さ45～100cmを測る。底部のやや東側寄りから，径21～23cm，深さ13cmを測るピット1が検出された。土壙内は，細かい炭化物や灰を多量に含有した焼土の単一土層が底面より約70cm上方まで及んでいるが，土壙の壁には火を受けた形跡が認められなかった。

土壙内の遺物は，床面の中央あたりに壷形・甕形・鉢形土器等の破片がまとまりを有しながら散乱した状態で比較的多く見られたほか，南側寄りの床面約30cm上方よりほぼ完形に近い状態で出土した壷形土器1点があげられる。この壷形土器は，体部に大小2カ所の焼成後の穿孔を有している。

また，土壙の周囲に検出された4カ所のピットは，径20～45cm，深さ18～35cmを測り，土壙の北半分を囲んで，傾斜面の上下で対応する位置に見られる。このことから，本土壙との関連を想起させるが，ピットの形状にばらつきが著しく判断し得ない。



第9図　土壙実測図

2. 遺　　物

本遺跡から出土した遺物には，土器，土製品などがある。これらの大部分は，先述した住居跡内及び土壙内から出土している。住居跡内から出土した土器は，その大半が，第2号竪穴式住居跡内からのものである。また，器種については，甕形土器，鉢形土器が全体の大部分を占め，完形品が多いことも特徴的である。さらに，後述するまとめに詳しいが，体部下半に小穿孔を有する壷形土器が鉢形土器によって蓋をしたような状態で出土している。なお，土製品については，第2号竪穴式住居跡の中央に位置する掘り込み（炉跡と考えられる）の中から焼土に混じって検出された。次に，土壙内から出土した土器には，壷形土器，甕形土器，鉢形土器などがある。これらの中には，体部に大小2ケ所の穿孔を有する壷形土器も含まれる。これらの他にも調査区内からは，多くの土器片が出土したが，器形を判断できるものはわずかであった。

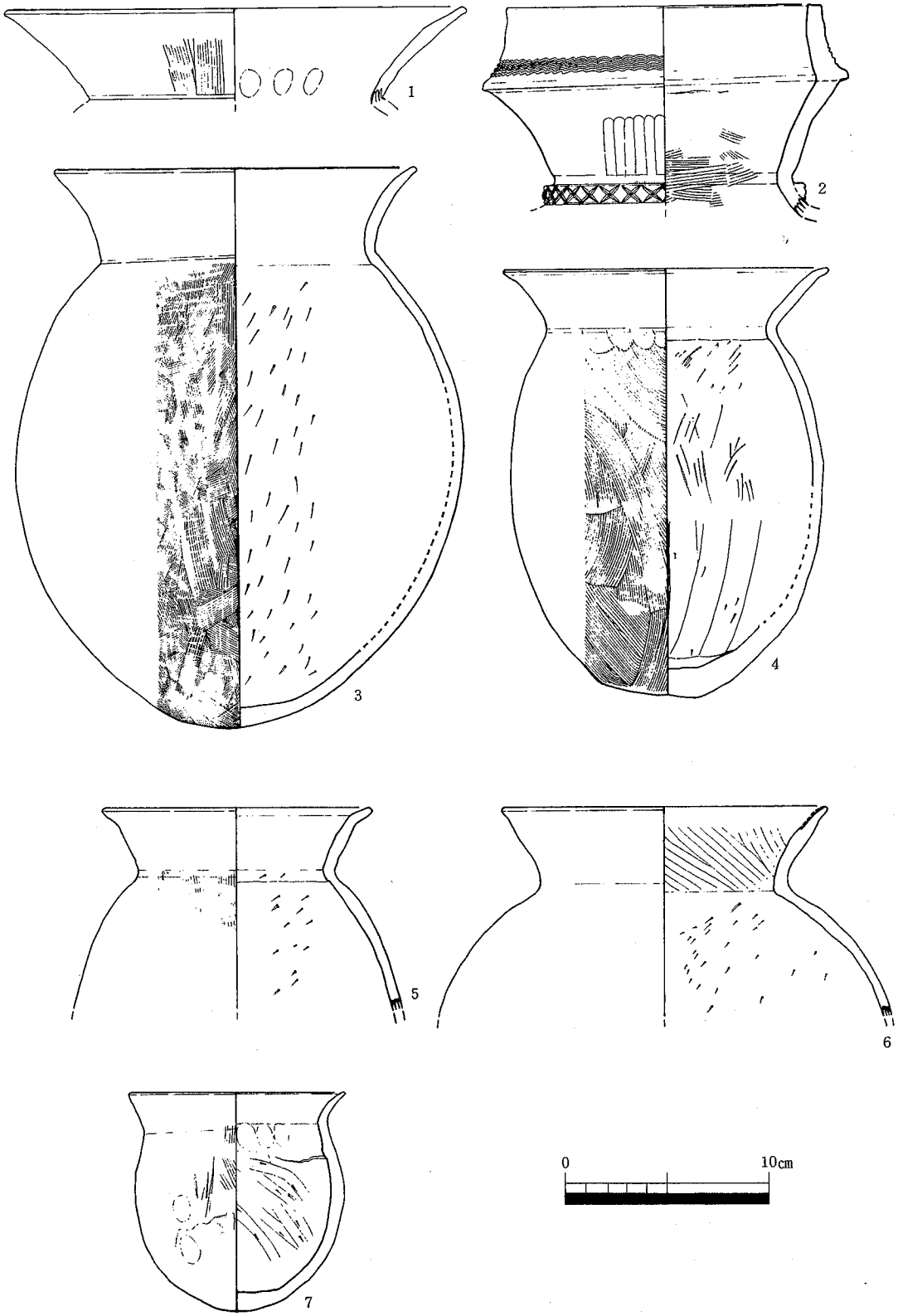
1. 竪穴式住居跡内出土土器（第10，11図）

ここで述べる土器のうち，**1**のみが第1号竪穴式住居跡内から出土し，**2**から**12**までは第2号竪穴式住居跡内から出土している。**13**，**14**については，第2号竪穴式住居跡内から出土しているが，出土状況からこれに伴うものとは考えにくい。

1は，復元口径22.2cmを測る口縁部で，「く」の字状に外反し，先に向かってしだいに薄くなり，口縁端部を丸くおさめている。後述する第2号竪穴式住居跡内出土のものと比較すると，その外傾する角度がやや大きい。外面は，口縁部の下半に縦方向のハケ目調整を施した後，ナデ調整を行っている。内面は，ナデ調整を施し，頸部寄りには指頭痕が認められる。胎土は，3mm以内の砂粒を含み，焼成は良好で，色調は全体的に赤褐色を呈するが，内面と外面上部は部分的に黒斑が認められる。

2は，口縁部の上半を内側へ折り曲げて，内傾気味に立ち上がる施文帯を有する複合口縁である。頸部より下側を欠失しているが，口縁部自体は完存しており口径14.0cmを測る。施文帯の下半には，4本単位の櫛歯状工具による波状文が周回し，屈曲する頸部には9mm幅の突帯を貼り付け，ヘラ状工具を用いて斜格子文を描いている。口縁部の上半は，横ナデ調整を施し，口縁端部はほぼ平たくおさめている。口縁部下半の外面は，原体幅5mm程度のヘラ状工具を用いて縦方向にそろえるように調整し，その後にナデ調整を加えている。内面は，頸部寄りを中心に横又は斜め方向のハケ目調整後，ナデ調整を施している。胎土は1～2mm大の砂粒を比較的多く含み，焼成はやや軟調ぎみで，色調は淡黄褐色を呈する。

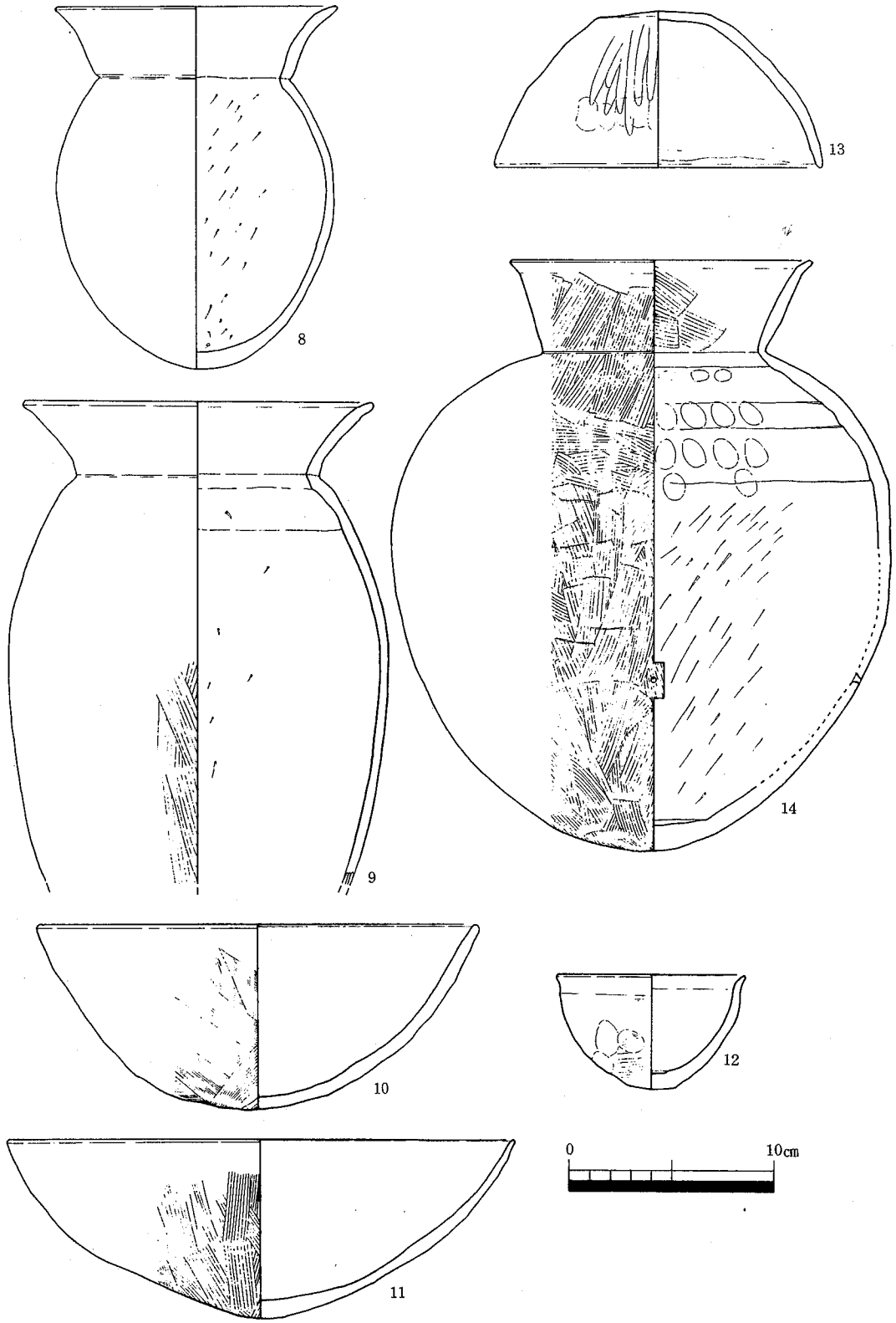
3～**9**は，いずれも甕形土器である。**3**は口径17.6cm，器高26.8cmを測る。「く」の字状に外反する口縁部は，先に向かってしだいに薄くなり，口縁端部は丸くおさめている。体部最大径は，22.0cmを測り，器高のほぼ中位に位置しており，底部は丸底を呈する。体部上半から口縁部にかけては，煤の付着が顕著である。口縁部は横ナデ調整を施し，体部の外面は，原体幅1.3cm程度のハケ目調整を密に施した後，ナデ調整を行っている。内面は，頸部付近まで縦方向のヘラ削りを施し，その後ナデ調整を行って器壁をなめらかにしている。胎土は2mm以内の砂粒を比較的多く含み，金雲母もかなり多く観察できる。焼成は良好で，色調は淡赤褐色を呈する。**4**は，口径15.7cm，器高20.5cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し，先に向かってしだいに薄くなる。口縁端部は，わずかに外へ折れ曲がり，丸くおさめている。体部最大径は15.3cmを測り，器高のほぼ中位に位置しており，底部は歪んでいるが平底に近い形状を示す。形態から見て，やや長胴気味の感がある。口縁部は横ナデ調整を行い，体部の外面は，原体幅1.3cm程度のハケ目調整を施した後，ナデ調整を加えており，頸部付近には指頭痕が認められる。内面は，体部全域にわたり，縦方向のヘラ削りを施し，その



第10図　竪穴式住居跡内出土土器実測図 (1)

後，上半を中心にナデ調整を行っている。胎土は3㎜以内の砂粒を含むが，まれに5㎜大の砂粒も混在しており，金雲母も認められる。焼成は良好で，色調は赤褐色を呈する。**5**，**6**は，共に上半部分のみであるが，復元口径はそれぞれ12.9㎝，15.8㎝を測る。両者とも「く」の字状に外反する口縁部を有し，先に向かってしだいに薄くなり，口縁端部を丸くおさめている。**5**については，**4**と同様に口縁端部をわずかに外へ折り曲げている。**5**の口縁部は横ナデ調整を行い，体部の外面は頸部直下まで磨滅が著しいが，わずかにハケ目痕が認められる。内面は，斜め方向のヘラ削り後，ナデ調整を施している。**6**の口縁部は，内面にナデ調整，外面に斜め方向のハケ目調整後，ナデ調整を施している。体部の外面は，磨滅が著しく調整不明でがるが，内面は斜め方向のヘラ削り後，ナデ調整を施している。両方とも，胎土は3㎜以内の砂粒を比較的多く含み，焼成は軟調ぎみで，色調は外面が明淡褐色，内面は黄褐色を呈する。**7**は，口径，器高とも10.4㎝を測り，「く」の字状にゆるく外反する短い口縁部を有し，先に向かってしだいに薄くなり，口縁端部は丸くおさめられている。器高の中位あたりに10.3㎝を測る体部最大径を有し，底部は丸底を呈している。口縁部は横ナデ調整を施し，体部の外面は，部分的に縦又は斜め方向のハケ目痕や指頭痕などが観察でき，特に下半は器表の凹凸が著しく，荒づくりの感がある。内面は，頸部直下に指頭痕が見られ，体部に斜め方向のヘラ削りを施している。底部は，棒状工具で押しつけて平たくしている。胎土は，2㎜以内の砂粒を比較的多く含み，金雲母も多く見られる。焼成は良好で，色調は赤褐色を呈する。**8**は，口径13.4㎝，器高17.1㎝を測る。口縁部は「く」の字状に外反し，先に向かってしだいに薄くなり，口縁端部は丸くおさめている。体部最大径は器高のほぼ中位に位置し13.4㎝を測り，底部は丸底を呈する。体部高は13.7㎝を測り，体部最大径と近似しており，球形に近い形態を呈している。外面には，体部から口縁部にわたって部分的に煤の付着が認められ，特に，体部の中位あたりは顕著である。口縁部は横ナデ調整を施し，体部の外面は，化粧土を掛け，その後にていねいなナデ調整を施している。内面は，全域にわたって斜め方向のヘラ削りを施した後，ナデ調整を行っている。胎土は3㎜以内の砂粒を比較的多く含み，金雲母も多く認められる。焼成は良好で，色調は赤褐色を呈する。**9**は，底部寄りを欠失しているため器高は不明である。口径16.8㎝，体部最大径18.5㎝を測るこの土器は，形態から見ると，かなり長胴化するものと考えられる。口縁部は「く」の字状に外反し，先に向かってしだいに薄くなり，口縁端部は丸くおさめている。口縁部は横ナデ調整を施し，体部の外面は部分的に磨滅しているが，縦方向のハケ目痕が認められる。内面は，縦方向のヘラ削り後，ナデ調整を施している。胎土は2㎜以内の砂粒を比較的多く含み，金雲母も多く見られる。焼成は良好で，色調は外面が淡赤褐色，内面は黄褐色を呈する。なお，外面全体に煤の付着が見られ，特に体部の中位あたりは顕著である。

10～**12**は鉢形土器である。**10**，**11**はともに丸底気味の底部から，内湾しながら立ち上がる体部を有し，口縁端部は丸くおさめられている。それぞれの口径は，21.2㎝，27.0㎝を測り，後者の方が大きい値を示すが，器高については8.7㎝，8.4㎝を測り，ほとんど差がなく，むしろ前者の方が若干高めである。このため，外観的には，前者がかなり深く，後者がわりと浅いという印象を与える。**11**は，形状全体の歪みが著しく，外面に煤の付着が認められる。両者とも，口縁端部は横ナデ調整を行い，外面には全域にわたり縦又は斜め方向のハケ目調整を施した後，ナデ調整を加えている。内面は，**10**がナデ調整を施し，**11**は磨滅が著しいため調整不明であるが，両方とも広範囲にわたって黒斑が認められ，**10**についてはそれが外面にも及んでいる。両方とも胎土は3㎜以内の砂粒を含み，金雲母もわずかに観察できる。焼成は，**10**がやや軟調ぎみで**11**はきわめて軟調で剝落が激しい。色調は，**10**が黄褐色で**11**は淡黄褐色を呈する。**12**は，口径9.0㎝，器高5.4㎝を測る小型品である。丸底気味の底部から内湾しながら立ち上がる体部を有し，口縁端部はわずかに外反する。口縁端部は横ナデ調整を行っており，外面には部分的にハケ目痕や指頭痕を観察でき，全体



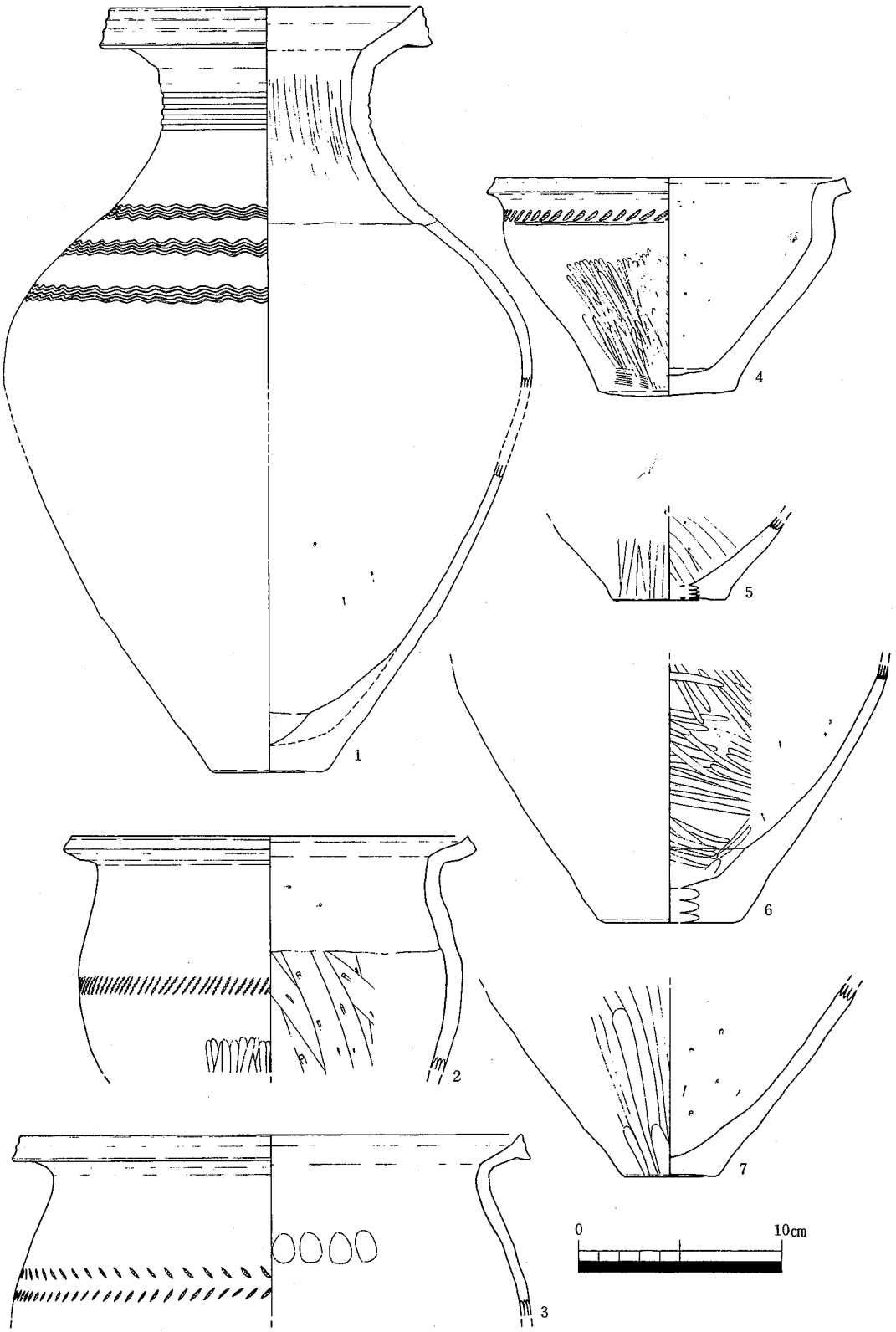
第11図　竪穴式住居跡内出土土器実測図(2)

的に器表の凹凸が著しく，荒づくりの感がある。内面は，ナデ調整を行い，底部を棒状工具で突いている。胎土は2㎜以内の砂粒を含み，金雲母もわずかに認められる。焼成は軟調気味で，色調は黄褐色を呈する。

13も鉢形土器であるが，出土状態からみて**14**の蓋として使用したものと考えられる。口径15.6㎝，器高7.4㎝，底径5.5㎝を測るこの土器は，平底気味の底部から，内湾しながら立ち上がる体部を有し，口縁端部は丸くおさめている。口縁端部は，横ナデ調整を施しており，内側にはヘラ状工具による横方向の削り痕が見られる。外面は部分的に指頭痕が見られ，ヘラ状工具により縦方向に調整している。内面は全域にわたり，上下方向のナデ調整を行っている。胎土は3㎜以内の砂粒を含み，金雲母も認められる。焼成は良好で，色調は赤褐色を呈する。なお，外面の一部には，煤の付着が認められる。**14**は，壷形土器で，口径14.4㎝（頸部内法10.0㎝），器高28.1㎝を測る。口縁部は，「く」の字状に外反し，先に向かってしだいに薄くなる。口縁端部はわずかに外に折れ曲がり，丸くおさめている。器種は異なるが，先述した甕形土器の口縁部と比較した場合，やや立ち上がり気味であるが，全体的な形状は似かよっており，特に**4**，**5**のものと類似している。体部のやや上位に24.2㎝を測る最大径を有し，肩部がやや張りぎみの感がある。球形に近い体部の下半には，焼成後に行ったと思われる直径2㎜程度の小穿孔を認めることができる。底部は丸底を呈し，部分的に煤が付着している。口縁端部は横ナデ調整を施し，口縁部の外面は，縦方向のハケ目調整後，ナデ調整，内面は横又は斜め方向のハケ目調整後，ナデ調整を行っている。体部の外面は，ハケ目調整後，化粧土を掛けて，さらに全域にわたって密に縦又は横方向のハケ目調整を施しており，その後にナデ調整を加えて，ていねいに仕上げている。内面の上部には，粘土帯の接合痕や，指頭痕が観察でき，その下側は，斜め方向のヘラ削り後ナデ調整を施し，器壁をなめらかにしている。胎土は3㎜以内の砂粒を比較的多く含み，金雲母も多く認められる。焼成は堅緻で，色調は黄赤褐色を呈する。

2. 土壙内出土土器（第12，13図）

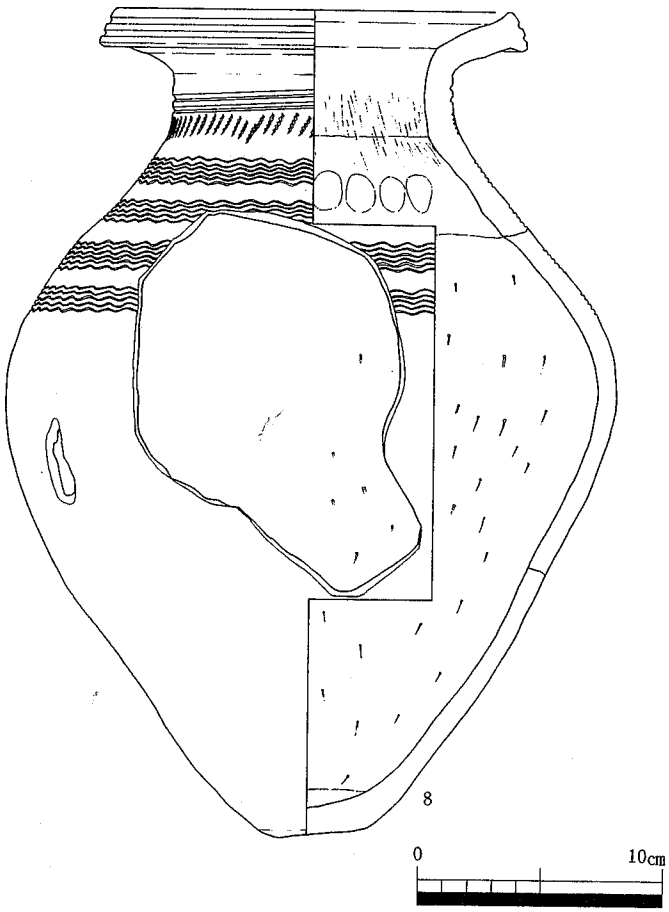
1は，壷形土器で，体部の一部分を欠失している。復元口径15.0㎝を測り，器高は36㎝程度と推定されるこの土器は，頸部から口縁部にかけて大きく外反し，端部は上下方向に肥厚し3条の凹線がめぐっている。頸部には4条の凹線がまわり，推定器高の中間よりやや上位に，外に大きく張り出し気味の最大径を有し，復元で25.6㎝を測る。底部は平底を呈し，その径は5.2㎝を測る。体部の上半には，5本単位の櫛歯状工具による波状文が3段にわたってめぐらされている。口縁部は横ナデ調整，頸部の外面はナデ調整を行っている。体部の外面は，磨滅が著しいため調整不明である。頸部の内面はしぼり痕が認められ，ナデ調整を施している。その下は，全域にわたり磨滅しているが，ヘラ削りをしたものと思われる。底部は，粘土を貼り付けて，押えによって厚く仕上げている。胎土は2㎜以内の砂粒を含み，焼成はきわめて軟調で器壁の剝落が著しく，色調は淡黄褐色を呈する。**2**，**3**は，甕形土器で，両者とも体部の下半を欠失しているため器高は不明である。**2**は口径19.3㎝，体部最大径は18.7㎝，3は復元口径24.3㎝を測る。両者とも「く」の字状に強く外反する口縁を有し，**2**は器厚をほぼ保ちながら口縁端部に至り，ほぼ平たくおさめており，**3**は，口縁端部が上下に肥厚し，2条の凹線がめぐっている。**2**は体部最大径付近に右上がりの貝殻腹縁文が1段めぐらされ，**3**は，5本単位の櫛歯状工具による刺突文が上下2段にわたってめぐらされており，上は左上がり，下は右上がりと向きを変えている。両者とも，口縁部は横ナデ調整，体部の外面はナデ調整を施しており，**2**は残存する体部の下半に縦方向のヘラ磨きが施されている。内面は，**2**の上半は横方向のヘラ削り後ナデ調整，その下半は縦方向のヘラ削りが施されている。**3**は，ナデ調整が施され，部分的に指頭痕が観察される。胎土は共に3㎜以内の砂粒を比較的多く含み，金雲母もわずかに認められる。焼成は軟調ぎみで，特に**3**は器表が剝落しやすい。色調は，**2**が黄褐色を呈し，その内外には部分的ではあるが煤の付着が認められ，



第12図　土壙内出土土器実測図(1)

3は淡黄褐色を呈する。4は鉢形土器で，口径16.9㎝，器高10.3㎝を測る。底径6.6㎝を測る平底気味の底部から，外上方に開く体部は，その上半で直立気味に立ち上がり，口縁部は「く」の字状に強く外反している。器厚は，外反する頸部から外に向かってしだいに薄くなり，口縁部はほぼ平たくおさめている。頸部直下に7本単位の櫛歯状工具による押し引き文がめぐり，口縁部は横ナデ調整を施し，体部の外面は縦方向のていねいなヘラ磨きを施した後，ナデ調整を施しており，下側にはわずかながらハケ目痕が認められる。底部は，ナデ調整を施している。内面は直立気味に立ち上がる部分に，横方向のヘラ削り後ナデ調整。その下には，縦方向のヘラ削り後ナデ調整を施している。底部には棒状工具によって押えた痕跡が見られる。胎土は2㎜以内の砂粒を比較的多く含み，金雲母もわずかながら認められる。焼成は良好で，色調は外面が赤褐色，内面が淡赤褐色を呈する。なお，外面には，部分的に煤の付着が認められ，一部に外部からの衝撃を受けたことによって生じたものと思われる器表の剝落した部分がある。

5～7は底部である。5，7は若干上げ底気味である。5，6の復元底径はそれぞれ5.2㎝，6.6㎝，7は底径4.4㎝を測る。5，7の外面はヘラ状工具による縦方向の調整後ナデ調整を施しており，内面には縦又は斜め方向のヘラ削りを行っている。6の外面は磨滅が著しく調整不明であるが，内面は縦方向のヘラ削り後横又は斜め方向のヘラ状工具による調整を加えている。胎土は総じて4㎜以内の砂粒を比較的多く含み，5についてはわずかに金雲母も観察できる。焼成は全体的に軟調気味で，色調は5の外面が黄褐色，内面が淡褐色，6の外面が淡褐色～赤褐色，内面が黄褐色，7の外面が赤褐色，内面は黒色を呈する。なお，5については，その形状及び焼成，胎土，色調などの特徴からみて，2と同一個体になる可能性もある。



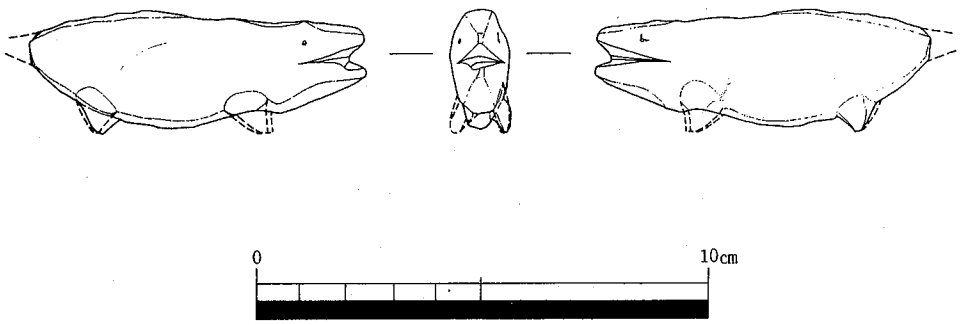
第13図　土壙内出土土器実測図(2)

8は体部に大小2ケ所の穿孔を有する壷形土器である。口径15.6㎝，器高32.8㎝を測るこの土器は頸部から口縁部にかけて大きく外反し，口縁端部は上下に肥厚し2条の凹線がめぐっている。頸部には2条の凹線が周回し，その直下に5本単位の櫛歯状工具による刺突文が回っている。体部上半には櫛歯状工具による波状文がめぐり，上から1段目と3段目に6本単位，2段目と4段目に5本単位の原体を用いている。器高の中間よりやや上位に外に大きく張り出す体部最大径が位置しており，24.7㎝を測る。底部は歪んでいるが，その径は3.5㎝を測り平底に近い形状

を示す。口縁部は横ナデ調整，外面は頸部以下にナデ調整を施している。内面は，頸部にしぼり痕，その下に指頭痕が認められる。体部には，縦方向のヘラ削りを施し，その後頸部までナデ調整を行っている。底部には棒状工具で押えた跡が見られる。胎土は3㎜以内の砂粒を比較的多く含み，金雲母も多く見られる。焼成は全体的に良好で，色調は明褐色を呈する。

3. 第2号竪穴式住居跡内出土土製品（第14図）

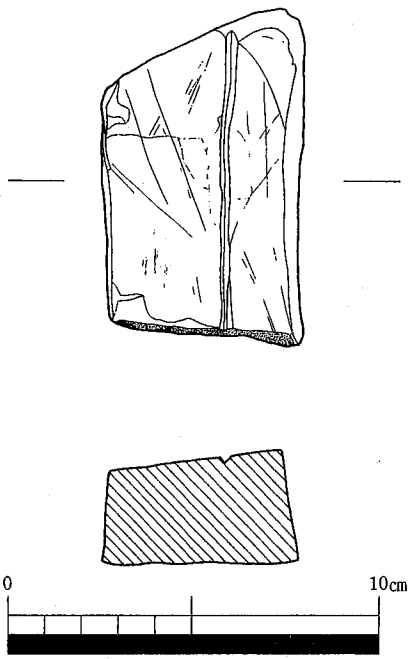
この土製品は，現存長7.3㎝，最大高2.7㎝，最大幅1.3㎝を測るものである。形状は，正面から見ると，縦長の扁平気味で，側面から見た場合，背中が直線的であるが，両側からの指頭の押えつけによって腹部がふくれており，身ごもっている感がある。顔の部分は，ヘラ状工具で口を大きく切り開き，目は細い棒状工具で刺突して表現している。全体的に，前方へ大きく突き出た顔を呈している。足はやや外側に張り出し気味の左の後ろ足が残っているが，両前足と右の後足の部分には，剝落痕が観察でき，欠失していることがわかる。以上のことから，この土製品は，四足獣をモチーフにしたものと考えられる。また，尻尾の部分については剝落した可能性があり，左目は部分的に縦および横方向の切れ込みを観察することができる。胎土は2㎜以内の砂粒を比較的多く含み，焼成は軟調で，色調は明赤褐色を呈する。



第14図　第2号竪穴式住居跡内出土土製品実測図

4. 第2号竪穴式住居跡内出土砥石（第15図）

この砥石は，最大長8.7㎝，最大幅5.3㎝，最大厚2.8㎝を測るものである。材質は，粘板岩質と考えられ，両小口面を除く四面すべてに使用痕を見ることができる。その内の一面は，長軸方向に断面V字状の削痕が走っている。



第15図　第2号竪穴式住居跡
内出土砥石実測図

3. ま と め

岡谷遺跡は，既述のとおり西側の宮下川や谷田を見おろす丘陵傾斜面に立地する集落遺跡で，竪穴式住居跡2軒，土壙1基を検出した。

以下，各遺構について若干の考察を加えてまとめにかえたい。

まず，尾根の西側傾斜面に位置する第1号竪穴式住居跡は，伴出する遺物から後述する第2号竪穴式住居跡の造営時期と極めて近い時期に営まれたものと考えられる。さて，柱穴と考えられるピットは，極めて小規模なもので，しかもその形状にばらつきが著しい。これは，本住居跡がかなり細い柱を使用して構築されていたことを物語るものであり，その造りが粗雑という感はいなめない。

次に，丘陵鞍部の西側傾斜面に検出された第2号竪穴式住居跡は，完形に近い土器を比較的多く伴出している。これらの土器は，器形の如何を問わず，全体的に薄手，丸底で，甕形土器においては，総じて「く」の字状に外反する口縁部を有し，端部に向って器厚を減じつつ丸くおさめるという弥生時代後期でもかなり新しい特徴を示している。したがって，本住居跡は，概ね弥生時代後期終末頃を中心に営まれたものと考えられる。

さて，本住居跡内には，柱穴（P_1～P_4）を囲む掘り方と，外側の一段高い床面の2段が検出されている。出土遺物のレベルを比較した結果，内側の掘り方範囲内に出土した遺物が，外側の床面とほぼ同一線上に位置するようである。

また，先述したとおりP_1～P_4については，内側の掘り方の四隅に位置しているものの，外側の掘り方に対して若干歪んでいる。したがって，本住居跡は，柱穴を再使用し，内から外への拡張を目的とした建て替えが行われたことを物語るものであろう。

さらに，当初の第2号竪穴式住居跡は，現存する形状からみて，四隅に柱穴を有する方形ないし隅丸方形に近いプランを呈していたものと考えられる。四隅に柱穴を有する住居の形態は，住居内の空間を最大限に利用できるという利点を持つと考えられ，この住居もこうした点を意図したものであろう。なお，当初の住居跡は，伴出する少量の遺物が小片ばかりで器形を判断することはできなかったが，拡張後の住居跡が柱穴を共用して後期終末頃に営まれたと考えられることから，若干先行する時期に営まれたものと見て大過なかろう。

ここで，別表に示す通り，本住居跡は，面積比で実に約3.3倍と他の例に比して，大幅な拡張が実施されたことになる。たとえば，住居の拡張を必要とする場合は，居住人数の増加が要因として考えることができる。そこで，居住人数の増加による拡張とすれば，本住居の場合は，急激にしかも短期間で居住人数が増加したことになる。単に家族内の人数が増加したのであれば，これほど大幅な拡張は必要とされないであろう。

すなわち，本住居跡に見られる拡張は，居住人数の増加が一要因とされるものの，それだけで実施されたものではないと考えられよう。

本住居内北側の土器群に近接して出土した壷形土器は，①蓋と考えられる小型の鉢形土器を伴出している，②頸部が欠けている，③体部に1カ所焼成後の穿孔が見られることから，棺として使用されたものと考えられる。しかも，頸部の内法が10㎝程度しかないことから，死産ないし流産といったように，ある程度被葬者の年齢，大きさが限定されるのではないだろうか。

また，この土器は，他の第2号竪穴式住居跡内の土器に比して，精良な胎土を使用し，焼成は極めて良好である。さらに，ハケ目調整が口縁部まで及び，肩部が張り比較的球体に近い形状を呈するといった特徴を有している。ただ，これらの特徴は，両者を明確に分類するものではないが，先述したとおり壷棺的な色彩が

濃い点や周囲の土器のレベルに比して床面より若干浮いた状態で検出された点を総合的に判断すると，この土器は，本住居跡に直接的には伴わない可能性が大きい。

以上の状況が認められる本住居跡は，完形に近い比較的多くの土器が床面に置かれた状態で検出されている。しかし，明らかに使用可能な鉢形・甕形土器が残っているにもかかわらず，食糧の貯蔵機能を有すると考えられる壷形土器が一点も見られない。このことから，本住居跡は，外的要因による廃絶ではなく，何らかの理由で意図的に廃棄されたものと考えたい。

最後に，丘陵の東側傾斜面に検出された土壙の性格について触れておきたい。

本土壙についてみると，伴出する壷形土器は，大きく外反する口縁部を持ち，上下に肥厚する端部に凹線，肩部に波状文を施している。また，同様な口縁部を有する甕形土器は，体部に刺突文が見られるといった弥生時代後期のうちでもやや古い時期の特徴を具備しているようである。これらのことから，本土壙は，概ね弥生時代後期前半に位置付けられるものと考えられよう。

さて，本土壙は，先述のとおり深さ約70㎝に及ぶ焼土が充満しており，他の堆積土層は観察されなかった。これは，検出状況からみて，意図的にしかも短時日に形成された可能性が強いものと思われる。また，伴出遺物についても，床面直上付近の一群の土器は，出土状況やほぼ完形になる鉢形土器の割れ口部分に外部からの衝撃による剝落が認められることから，人為的に破壊されたものとみることができよう。さらに，南側寄りの床面約30㎝上方から，体部に大小２カ所の焼成後穿孔を有する壷形土器を出土している。

以上のことから，本土壙は，貯蔵穴の機能を有していないものと考えられる。したがって，本土壙の場合土壙内を焼土で埋める理由や焼土が形成される原因について明らかにし得ない点が残るものの，祭祀あるいは埋葬施設に類するものと想定されよう。

広島市域の拡張住居跡一覧表

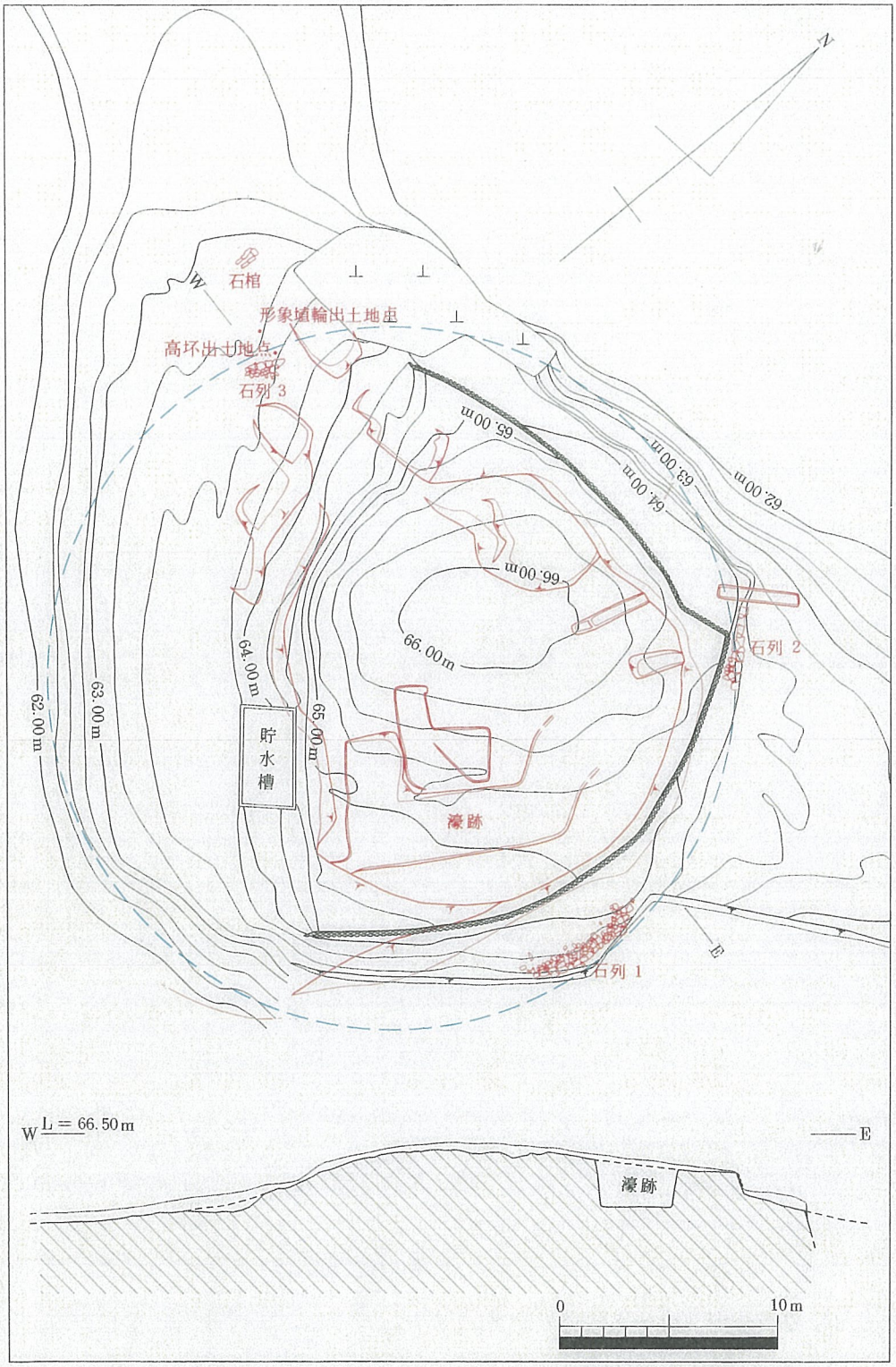
遺跡名	所在	住居№	プラン	規模（m）	床面積（㎡）	拡張率	備考
長う子遺跡	安佐南区祇園町	2号	円形	径 4.2	13.8		
		3号	〃	〃 5.8	13.4	1.9	2号→3号
		4号	〃	（推径） 7.4	約 42	1.5	3号→4号
丸郎杖遺跡	〃	前	方形	8 × 6.2	49.6		
		後	〃	9 × 6.2	55.8	1.1	
中矢口遺跡	安佐北区高陽町	4号	隅方	4.2 × 3.9	16.3		
		2号	〃	6.5 × 6.4（推定）	約 41	2.5	4号→2号
高陽台B地点遺跡	〃	1号	円形	最大径 5	約 19		
		2号	〃	〃 6.8	約 36	1.8	1号→2号
畳谷遺跡	東区温品	SB5（前）	円形	〃 7.8	約 47		
		〃（後）	〃	〃 8.8	約 60	1.2	
岡谷遺跡	安芸区矢野町	2号（前）	方形	3.6 × 3.5	12.6		
		〃（後）	方ないし隅方	6.8 × 6.2	42.16	3.3	

Ⅳ 狐が城古墳

1．遺　　構 …… 24

2．遺　　物 …… 28

3．ま　と　め …… 33



第16図　狐が城古墳地形測量図および遺構配置図（破線ラインは墳丘推定ライン）

1. 遺　　構

狐が城古墳は，広島市安芸区矢野町字狐が城に所在しており，標高492.2ｍの明神山から北に派生した丘陵の尾根上に位置している。標高約66ｍを測る丘陵最高所からは，海田湾及びその湾岸地域が一望でき，本古墳は，この良好な場所に立地している。本古墳の立地する丘陵は，標高200ｍあたりからなだらかに延びており，この他にも遺跡の存在が予想されたが，分布調査及び試掘調査では確認されなかった。

さて，本古墳は古くから周知されており，昭和16年7月，多数の円筒埴輪片が出土している。(注1) また，終戦後，本古墳が耕作地として利用された際にも，円筒埴輪片が出土したと伝えられている。(注2) 調査前の地勢状況は，段々畑として利用された形跡が見られたが，現況は雑木林である。調査区は，現存する墳頂部の最高所を中心にして，方位に従って四分割して設定した。調査の結果，石列3カ所，石棺1基を検出したが，墳丘上に，深さ1.7ｍ～2ｍを測る高射砲施設関連の壕が見られるなど，(注3) 後世の攪乱による墳丘削平が著しい状況を呈していたため，本古墳の内部主体は検出するに至らなかった。

石　列　1（第17図）

石列1は，墳丘の東側斜面に位置し，現存最大幅約1.4ｍ，長さ約6.2ｍを測り，北一南方向で標高63～63.5ｍのレベルを保ちながら，円弧状に検出された。この石列は，10～50㎝大の割石を用い，最下部に比較的大きな石を配して安定を図り，ほぼ水平に2段目の石を置き，傾斜角約35°をもって3段目以降の石を配置している。石と石の隙間には，赤色粘質土が見られ，これは崩落を防ぐための目詰めと考えられる。さらに，流れ込みの円筒埴輪片が石材に密着した状態で出土している。

なお，この石列の検出地点は，墳丘の北側や西側に比べて傾斜が急な上に，法面に接しており，耕作に適さない狭い場所である。このことから，本石列は，耕作を含む後世の攪乱を免れたために遺存していたものと考えられよう。

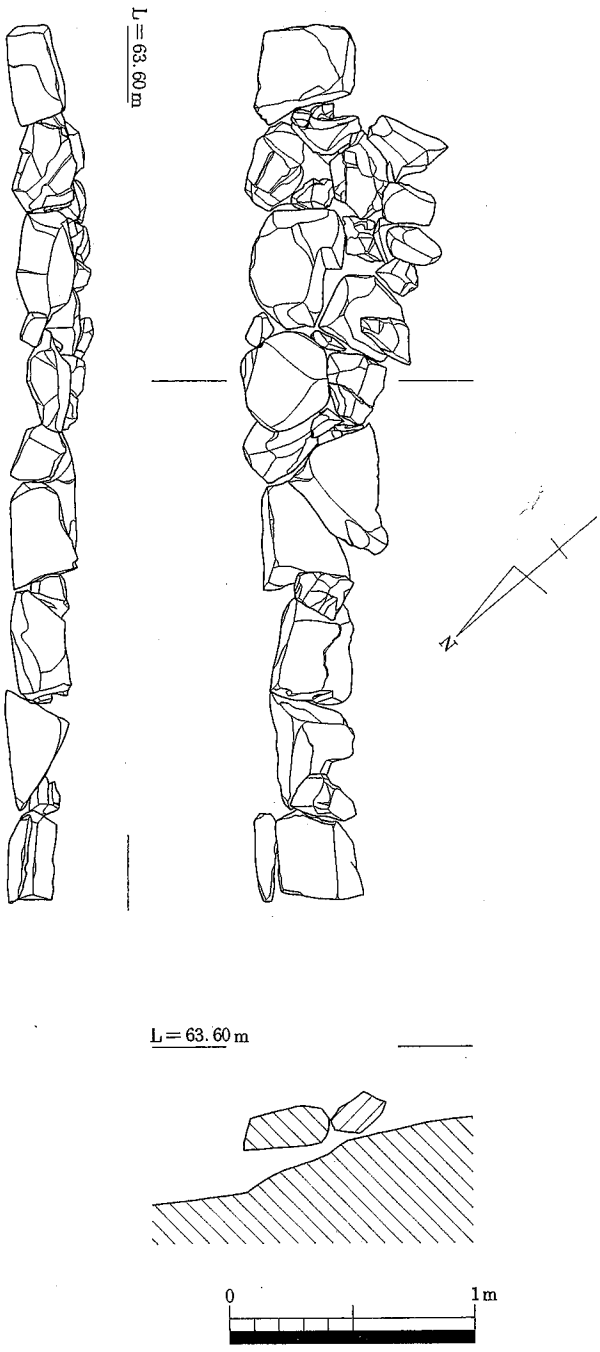
石　列　2（第18図）

石列2は，墳丘の北東側に位置し，現存最大幅約0.8ｍ，長さ3.5ｍを測り，南東一北西方向で標高的63ｍのレベルを保って検出された。この石列は，40～50㎝大の割石を使用しており，傾斜角約20°をもって，斜面に2～3段貼り付けられている。また，この石列の西端は，後世に掘られたと思われる幅約0.6ｍ，長さ3.7ｍの溝でカットされており，溝内には，本石列に使用したものと同様な石材が，散在していた。

なお，本石列は，①他の石列に比してほぼ直線的な配列状態を示し，使用された石材もかなりていねいな面取りが施されていること，②石列およびその周辺からは，流れ込みと考えられる円筒埴輪片が出土していないこと，③石列が検出された地点が，墳丘の最高所を囲んでいた石垣に隣接する場所であることから，後世に築造された可能性を強く感じさせるようである。



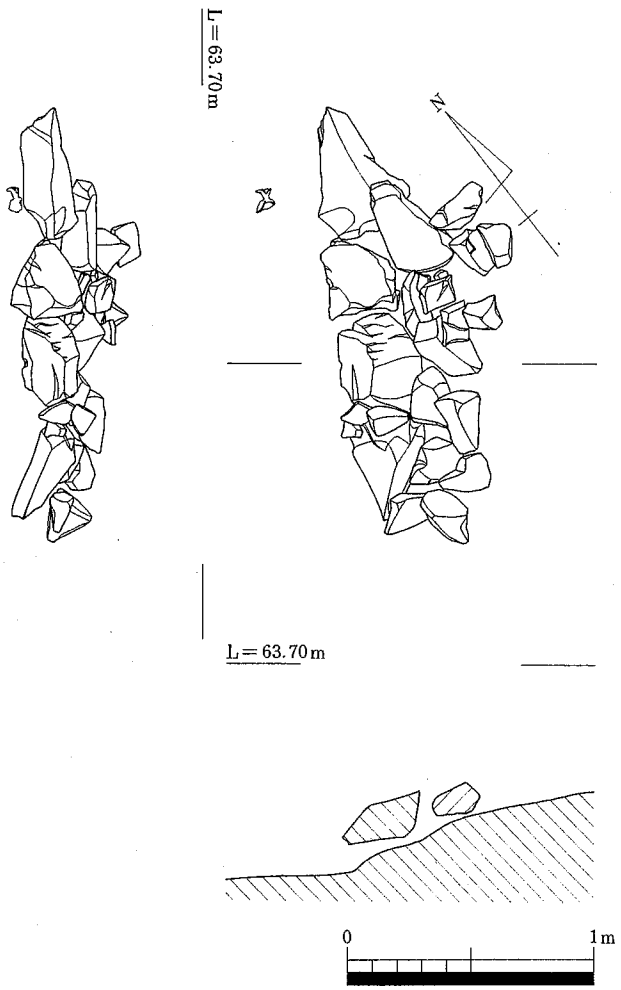
第17図　石　列　1　実　測　図



第 18 図　石列 2 実測図

石　列　3（第19図）

石列3は，墳丘の西側斜面に位置しており，現存最大幅約0.8ｍ，長さ約1.7ｍを測り，北東―南西方向で標高約63ｍのレベルを保ち，わずかに円弧状を呈しながら検出された。前述した石列同様，外側に40～50㎝大の割石を用い，傾斜角約20°をもつ2～3段目の部分には，20～30㎝大のものを使用している。さらに，石列1と同様に，周辺からは流れ込みの円筒埴輪片が出土している。また，石列のすぐ下方より土師器の高坏形土器や，形象埴輪片も出土している。

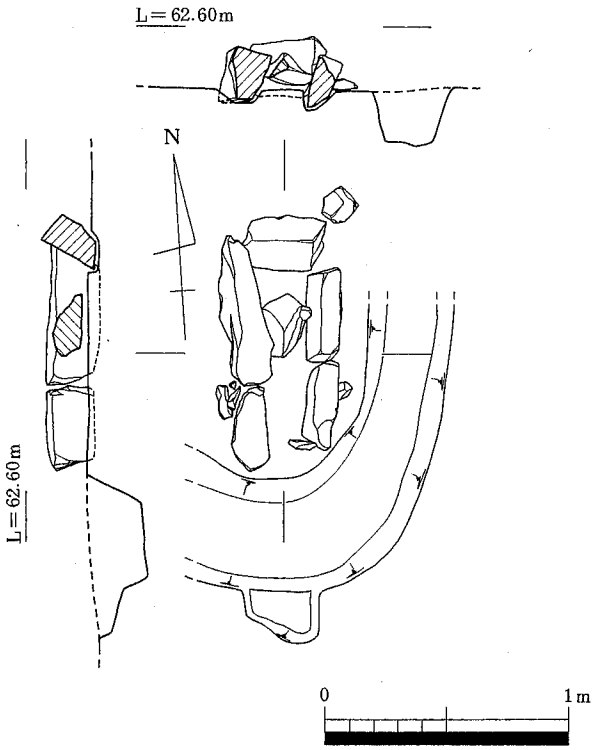


第19図　石列3実測図

石　　棺（第20図）

本石棺は，石列3の北西約5mに位置する箱式石棺である。後世の攪乱を受けているため，北側小口石1枚，東西側石2枚ずつの計5枚が残存するだけで，他の石材は欠失していた。北側小口石は外方に，また，両側石は墳丘側にやや傾斜した状態で検出された。現存する石棺の内法は約80cm，幅20～25cm，深さ16cmを測り，主軸はN 4°Eと南北に近い向きを指す。棺内からの遺物は，何ら出土しなかったが，墳丘裾部に検出された石列の石材およびその周辺に散在していた石材と同様な割石1個が見られた。このことは，石棺がつくられて比較的早い段階で攪乱を受け，石が落ち込んだことを物語っている。

なお，頭部は，現存する棺材が北側に開く配置状況からみて，北側と考えられる。また，石材の規模や側石の配列状況からみて，これ以上大幅に長くなるものではないと推定され，さらに，内法の幅がかなり狭いことから，小児用石棺とみて大過なかろう。しかし，この石棺がつくられた時期や古墳との関係については明らかにし得なかった。



第20図　石棺実測図

（注1）　矢野町町史編纂委員会編『広島県矢野町史上巻』1958
（注2）　聞きとり調査による。
（注3）　今回の調査により，古墳の北側から高射砲施設が見つかった。

2. 遺　　物

本古墳から出土した遺物には，大量の埴輪と土師器の高坏形土器1点がある。埴輪は，出土遺物の大部分を占めているが，原位置を保っているものは皆無で，すべて流れ込みの出土状況を示していた。これらの埴輪は，いずれも小片となって出土し，その多くは墳丘の西側を中心に見つかった。今回の調査によって出土した埴輪には，円筒埴輪と形象埴輪があり，前者の中には，朝顔形円筒埴輪も含まれる。後者は，断片のみの出土であるが，その形態的特徴からみて，家形埴輪の一部と推定される。しかし，両者とも，その形態の全容を知り得るものは1点もなかった。高坏形土器も，埴輪と同様に，流れ込みの状況で検出されたが，唯一，その形状全体を推定し得る遺物である。

1. 円筒埴輪（第21，22図）

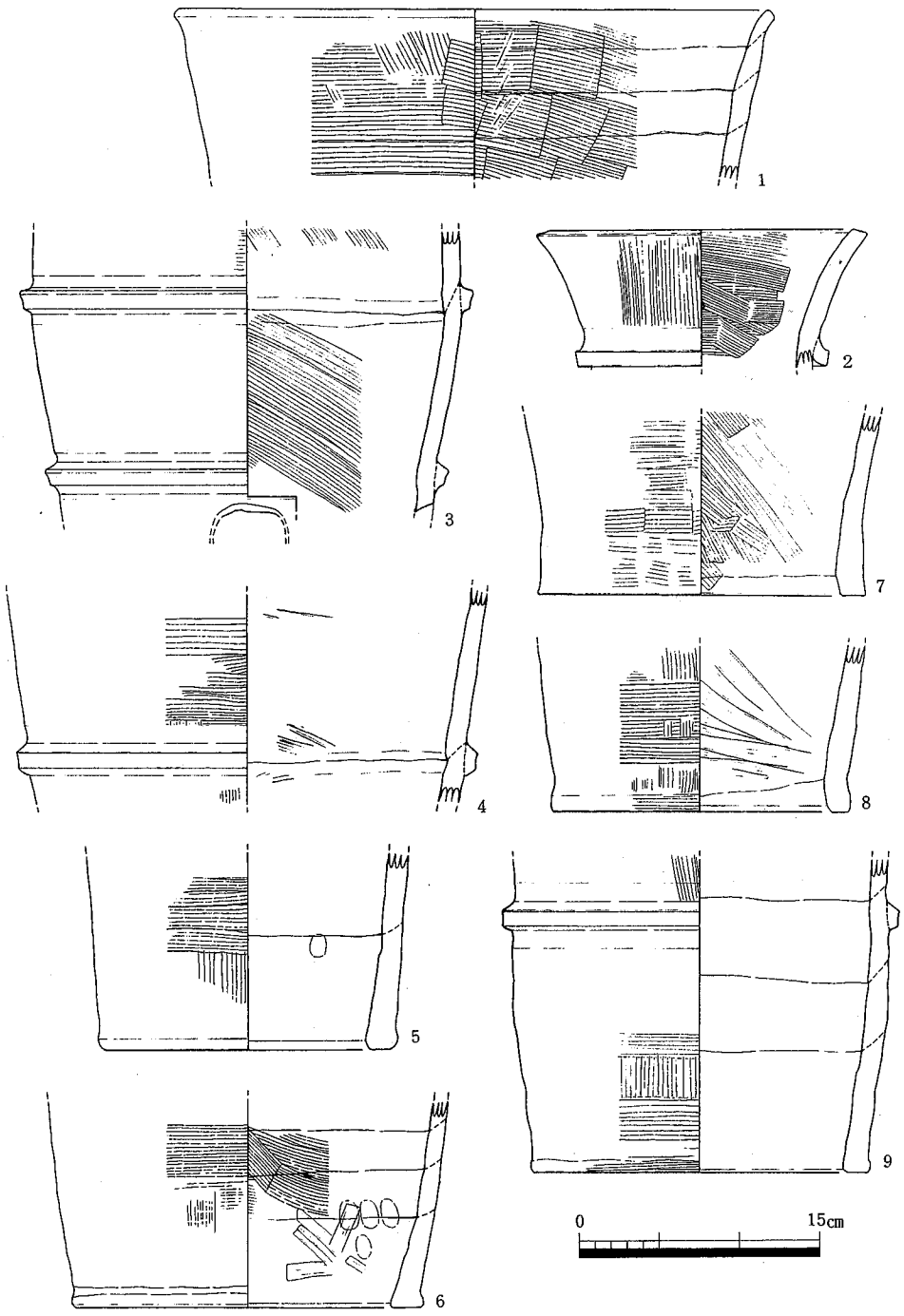
1は，復元口径36.0cmを測る口縁部で，上方に向かって外傾しながら，ほぼ直線的に延びている。口縁端部はわずかに外反し，ほぼ平たくおさめている。外面は，横方向に整然とそろえるようにハケ目調整を施した後，ナデ調整を行っており，上部には，斜め方向のハケ目が認められる。内面は，横又は斜め方向のハケ目調整を重ねるように施し，その後にナデ調整を行っている。胎土は，5㎜以内の砂粒を比較的多く含み，金雲母も多く見られる。焼成は良好で，色調は明褐色を呈する。なお，外面の一部には黒斑が認められる。

2は，その形態的特徴からみて，口縁部と考えられるもので，復元口径18.8cmを測る小ぶりなものである。形状から見ると，外傾度は，**1**と比べて大きく，外面のハケ目が縦方向に認められ，さらに，タガを有する部分から下部が外に開く傾向が見られる。これらのことは，後述する朝顔形円筒埴輪の口縁部と類似する部分とみることができ，**2**が朝顔形円筒埴輪の範疇に含まれる可能性が強いことを示唆している。外面はハケ目調整後ナデ調整を施し，タガの部分は横ナデ調整を行っている。口縁端部はナデ調整により平たくおさめている。内面は，横又は斜め方向のハケ目調整後ナデ調整を行っている。胎土は3㎜以内の砂粒を多く含み，金雲母も多く認められる。焼成は良好で，色調は赤褐色を呈する。

3，**4**は体部で，共に上方に向かって外傾しており，**3**の上半部はまっすぐに立ち上がり気味で，下側に透かし孔が認められる。共に断面台形状のタガを有し，**3**の場合，2本のタガの間隔は10.8cmである。外面は両者とも磨滅が著しいが，横方向のハケ目調整後ナデ調整を施し，タガの部分は，横ナデ調整を行っている。**4**は，タガの上下に縦方向のハケ目がわずかに観察できる。内面は両方とも横又は斜め方向のハケ目調整後ナデ調整を行っている。両者ともに，胎土は，4㎜以内の砂粒を含み，金雲母が多く見られる。焼成はやや軟調ぎみで，色調は淡褐色を呈する。なお，**4**の外面には部分的に黒斑が認められる。

5～**9**はいずれも底部で，総じて，外傾しながら上方へ延びている。復元底径は，それぞれ18.6cm，21.8cm，20.3cm，18.5cm，21.0cmを測り，**9**は底面から15.5cmのところに断面台形状のタガを貼り付けている。外面は，横方向のハケ目調整を行った後，部分的に縦方向のハケ目調整を施し，ナデ調整を加えている。内面は，磨滅が著しく調整方法がわかりにくいものもあるが，総じて，横又は斜め方向のハケ目調整を施している。それらの中には，**6**，**8**のようにヘラ状工具によって調整しているものも見受けられる。胎土は，総じて3㎜以内の砂粒を含むが，中には，**6**のように1cm大の小石が混じるものもある。焼成は**5**，**6**，**7**が良好，**8**，**9**が軟調気味である。色調は**5**，**6**が明褐色，**7**，**8**，**9**は赤褐色を呈する。

なお，底部端面の中には，断面が円形に近い圧痕が残っているものが認められる。このことは，成形時に



第21図　狐が城古墳出土円筒埴輪実測図(1)

禾本科植物の茎がめり込んだ痕跡と考えられ，さらに，断面観察の結果，それを引き抜いたような痕跡がないため，焼成時に消滅した可能性が高いことを示唆するものであろう。(注1)

10，**11**は朝顔形円筒埴輪で，その形態から，前者は口縁部，後者はくびれ部と考えられる。

10は，復元口径38.0㎝を測り，外反気味に大きく外側に開く形態を示す。口縁部の上半には部分的に黒斑が観察でき，口縁端部から12.2㎝のところに断面台形状のタガを貼り付けている。外面は，縦方向のハケ目調整後ナデ調整を行い，タガの部分には横ナデ調整を施している。内面は，横又は斜め方向のハケ目調整を施した後，ナデ調整を行っている。胎土は，3㎜以内の砂粒を含み，金雲母も多く認められる。焼成は良好で，色調は淡赤褐色を呈する。

11は，屈曲部付近に断面台形状のタガを貼り付け，上下に大きく開いている。上面を向く内側の先端寄りには，ヘラ状工具により「ノ」の字状の刻みがめぐっており，口縁部上半との剝離痕であることが考えられる。口縁部上半は，この上に直立気味に立ち上がるものと推定され，(注2)**1**とは異なる形態を有するものである。この場合，口縁部上半と口縁部下半の接合箇所から外へ突出する下半部の先端は，タガとして見ることができ，他の場合が貼り付けていることを考慮すると，異質な感を否めない。外面は，タガの部分に横ナデ調整を施す他は，縦方向のハケ目調整を施し，内面は磨滅が著しいものの斜め方向のハケ目が認められる。胎土は，4㎜以内の砂粒を含み，金雲母も多く観察できる。焼成は良好で，色調は明褐色を呈する。

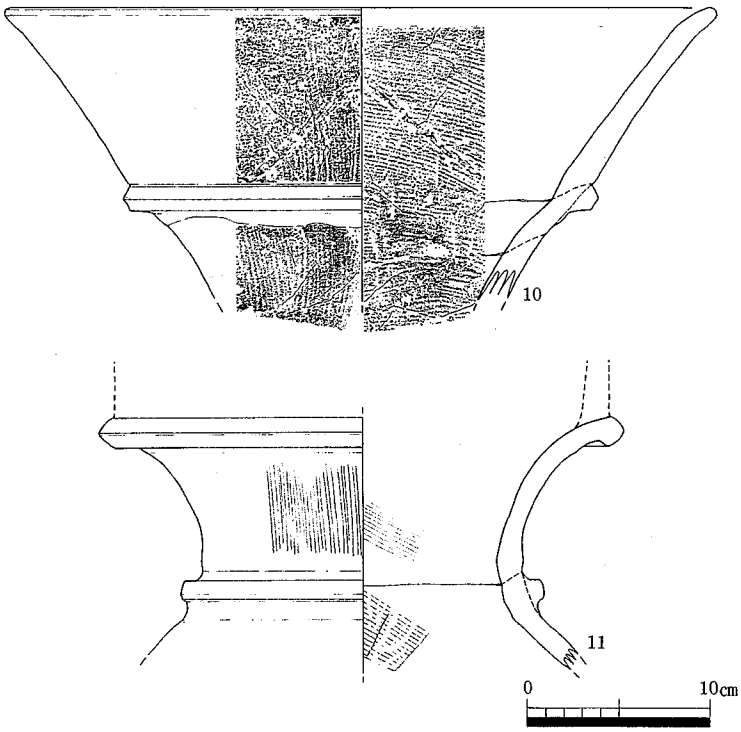
2. 形象埴輪（第23図　1，2）

1は，断片であるが，その形態的特徴からみて，家形埴輪の壁の一部と考えられるものである。内側には粘土帯を積み上げた痕跡が観察され，端部に幅3.6㎝，厚さ0.7㎝の突帯を貼り付け，その裏側は，ほぼ直角に屈曲している。残存部からみて，突帯も同様に屈曲するように貼り付けられていたものと考えられる。これらのことからみて，この断片は，壁の中でも隅寄りの部分であることが考えられよう。表には，横方向に綾杉文が2段にわたって施されており，この文様は，途中で向きを変えている。下側の面は，台部との剝離部分の可能性が考えられそうである。器厚は1.2㎝を測り，両面ともナデ調整を施し，胎土は比較的多くの砂粒を含み，焼成は良好で，色調は明褐色を呈する。

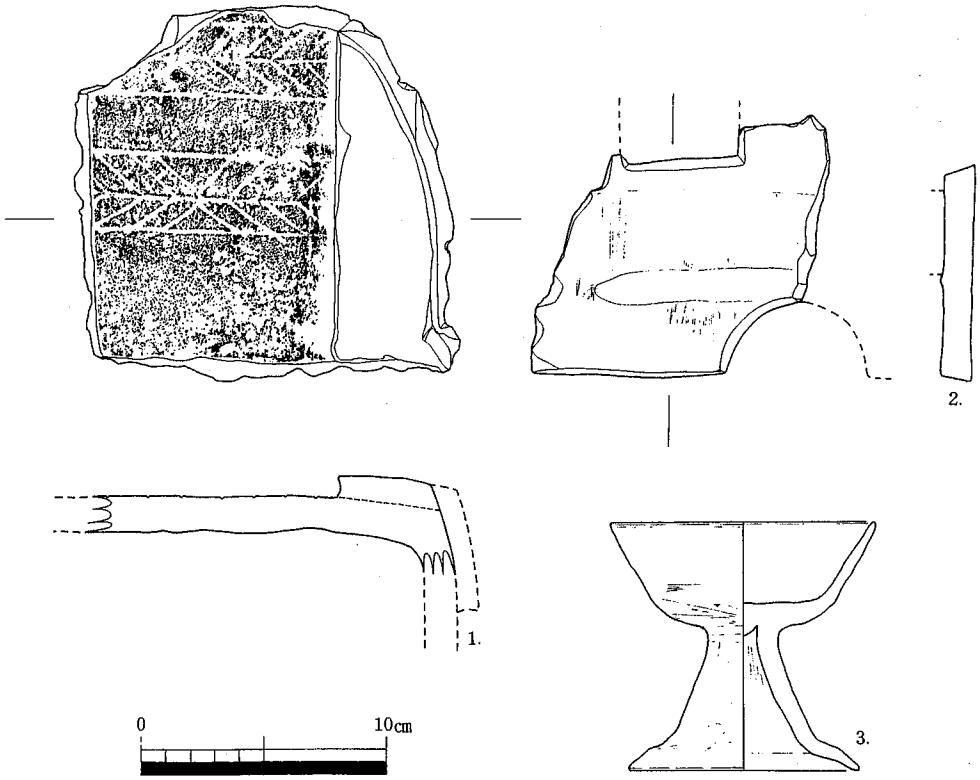
2も，**1**と同じく断片のみであるが，その形態からみて，家形埴輪の壁から台部にかけての一部と考えられる。台部には，半円形の透かしが見られる。さらに，突帯を貼り付けていたと思われる剝離部分をはさんで，その上の壁側には，方形の透かし孔が認められ，窓又は出入口を想起させる。表には，縦方向のハケ目，裏には粘土帯の継ぎ目が観察され，器厚は約1.2㎝を測る。胎土は3㎜以内の砂粒を多く含み，焼成はやや軟調ぎみで，色調は明褐色を呈する。これらの他にも，壁と台部の間を区別していたとみられる突帯や，屋根の破風板と考えられる断片が見られた。以上のように，今回の調査で検出された形象埴輪は，全て断片のみであったためその全容を推測し得なかった。即断は避けたいが，これらの胎土，焼成，色調などの違いから，少なくとも2～3個体分の家形埴輪が存在する可能性も考えられそうである。

3. 高坏形土器（第23図　3）

今回の調査により，器形全体を知り得るただ一つの遺物である。この高坏形土器は口径10.4㎝，底径9.0㎝，器高9.6㎝を測る小型品で，全体的にきわめて粗雑なつくりである。坏部は，底が厚手につくられ，鈍い稜線をもって外上方に向かって立ち上がり，口縁端部は丸くおさめている。脚部は円錐状に下がり，端部付近で一段と大きく開く。坏部と脚部の接合方法は判断しにくいが，坏の底部にヘソ状の突起が認められることから，坏部に脚部を差し込んで接合したものと思われる。坏部の内側は，ナデ調整，外側は部分的に横



第22図　狐が城古墳出土円筒埴輪実測図(2)



第23図　狐が城古墳出土形象埴輪および高坏形土器実測図

方向のハケ目調整後ナデ調整を施している。坏部と底部の接合部分には，指頭による押えがみられ，脚部の外面は，ヘラ状工具によって縦方向に調整しており，わずかに稜線が見える。内側には，しぼり痕が認められ，部分的にヘラ状工具を用いて調整している。胎土は1～2㎜大の砂粒を含み，焼成は軟調で，色調は暗赤褐色を呈する。

（注1） 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌64—2』1979
県内で同様の例を有するものは，酒屋高塚古墳，三玉大塚古墳，四拾貫小原第17号古墳などがある。

（注2） 同様の形態を示すものとして三次市緑岩古墳を挙げておく。

参考文献

広島県教育委員会「酒屋高塚古墳」1983
広島県双三郡吉舎町教育委員会「三玉大塚」1983
広島県教育委員会，㈶広島県埋蔵文化財調査センター「下山遺跡群発掘調査報告」1980
広島県教育委員会「緑岩古墳」1983

3. ま と め

既述したように，海田湾沿岸地域では，とりわけ海岸沿いの丘陵先端付近に様々な古墳が分布しているようである。今回調査を行った狐が城古墳もその一つで，調査の結果，検出された石列から，今まで言われていた東西27m，南北18m[注1]を上回る推定直径約31m・現存高約2.6mを測る市内最大級の規模を有し，この古墳の被葬者が傑出した勢力を保持していた人物であることを物語っている。

まず，遺存していた石列について検討を進めてみたい。

標高約63mのレベル上に検出された3カ所の石列を比較した場合，石列2については，先述したように古墳に伴う可能性は少ないと考えられるが，石列1は，石材の隙間に粘土を詰めてその安定を図り，円弧状を呈する石列の外側に比較的大きな石材を横長に配列している。さらに，流れ込みではあるが円筒埴輪片が石に密着しており，この場所は後世の攪乱を免れている。また，石列3についても，石列1に比して傾斜角が緩やかなためか，粘土による目詰めは施されていないが，周囲に多数の埴輪片が見られ，すぐ下方からは完形に近い土師器の高坏形土器が出土している。その上，石列の外側に大きめに石を置いている。これらは共に墳頂へ向けて石材が延びる傾向を示しており，両者とも葺石の一部と考えて大過なかろう。

次に，今回出土した埴輪について若干の考察を加える。

出土した多数の埴輪片は，原位置をとどめるものは皆無で，また，小片が大半を占めており，復元により全体の形状を把握するには至らなかった。ただし，円筒埴輪については，部分的に計測可能であった。この計測値は，概ね底径18～22cm，底部から1段目のタガまで13～16cm，中段のタガ間隔約11m，最上段のタガから口縁部まで10～15cm，口径30～40cmである。これらの計測値及び器壁の傾斜角度から，円筒埴輪は，概ね器高35～50cmで，タガを2～3本有し，口縁部にむかって広がる形態を示すものと思われる。さらに透かし孔は，円形のものがタガとタガの中間よりやや上位に見られるようである。これら円筒埴輪については，表面に黒斑が見られるものがあり，焼成法は，野焼きによるものと考えられよう。[注2]

また，石列3の周辺から出土した形象埴輪片は，市域初見のものである。その中で，石列3の西側約1.4mのところで検出された断片は，端部に貼り付けられている突帯は柱を表現したものと思われ，この突帯から横方向に施されている上下2条の綾杉文は，装飾的意味合いを持つとともに貫をモチーフしたものと考えられる。このような形態的特徴を有することから，家形埴輪の一部分とするのが妥当であろう。

現在のところ，市域において円筒埴輪を有する古墳は，矢野町（西尾古墳[注3]，丸古古墳[注4]）と祇園町（尾首古墳[注5]，池の内第2号古墳[注6]）で，本古墳を含めて5例を数えるに過ぎない。古墳の築造時期についても，ほぼ5世紀代の範疇に位置付けられているものばかりである。これらは，埴輪列の状態や数量について明らかにされていないが，現在のところ両地域に限られている点では興味深いところである。

さて，内部主体についてであるが，本古墳の場合は，大幅な攪乱を受けて既に跡形もなく欠失しており，検出するには至らなかった。矢野町域において，本古墳と同様に5世紀代の範疇に位置付けられている西尾古墳，丸古古墳は竪穴式石室，神森古墳群（西崎箱式石棺群）は箱式石棺を内部主体としている。本古墳との関係は明らかでないが，前二者については既に述べたとおり，円筒埴輪を有する点で共通点が見られる。これらのことは，本古墳の内部主体を推測する一つの手がかりとなるものかも知れない。

最後に，本古墳の造営時期について触れておきたい。

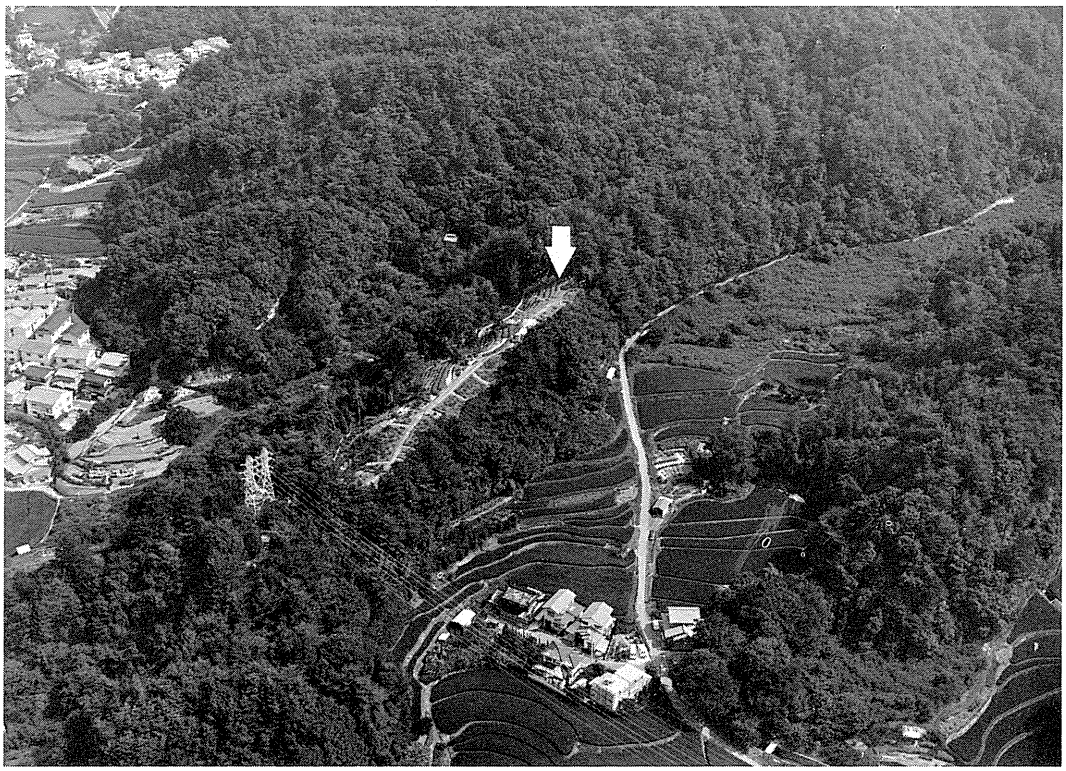
本古墳については，内部主体がなく，それに伴う副葬品も見られなかった。このような状況の下で，本古墳の築造時期を推定する資料は，埴輪と土師器の高坏形土器1点という極めて限られた状態である。また，

攪乱が著しいため，即断し得ないが，須恵器は全く検出されなかった。

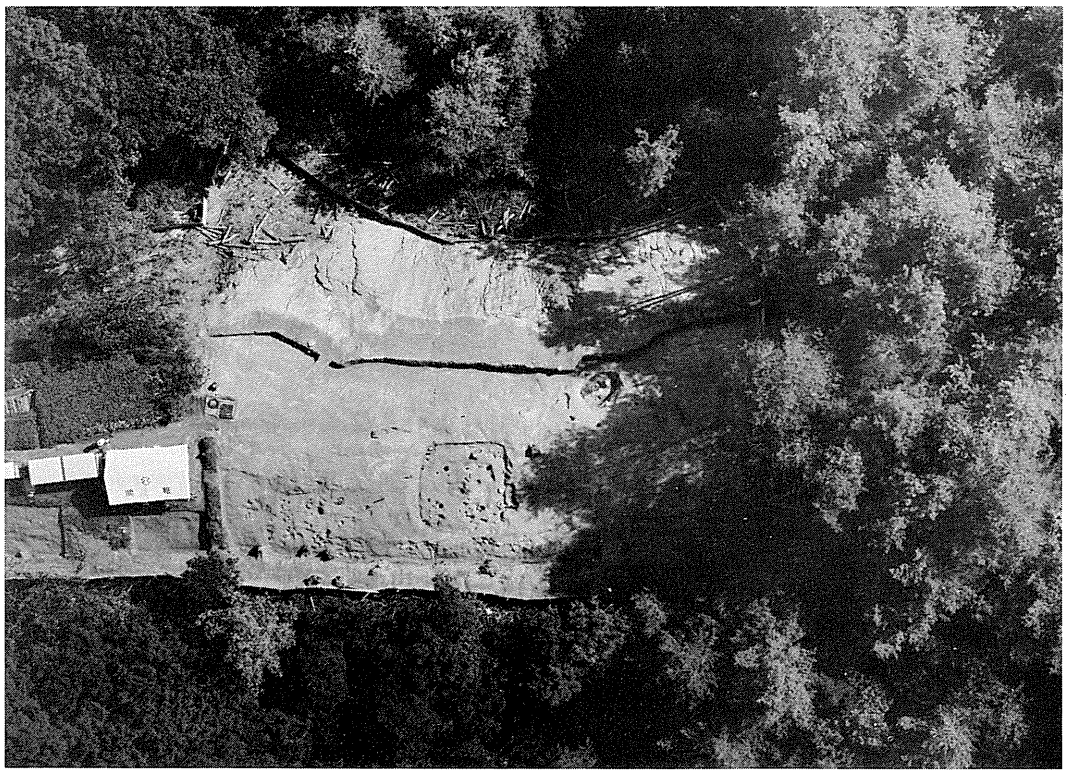
本古墳は，丘陵上を独占して造営されており，市域でも最大級の規模を有し，葺石，埴輪などの外部施設を持っている。このうち，円筒埴輪については，川西編年でいう第Ⅲ期に近い特徴を具備していることが指摘される(注7)。また，土師器の高坏形土器については，坏部が深く丸味をともない，各部分にのこされた稜が失われつつある過程を示し，中期の土師器の中では，時期の降る傾向が見られるようである(注8)。したがって，これらのことから，本古墳は，5世紀前半のうちでもやや降る時期に造営されたものと考えられよう。

（注１） 矢野町町史編纂委員会編『広島県矢野史上巻』1958
（注２） 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌64－2』1979
（注３） 注１に同じ
（注４） 注１に同じ
（注５） 広島県教育委員会「尾首城跡発掘調査報告」1984
（注６） 広島市教育委員会「池の内遺跡発掘調査報告」1985
（注７） 注２に同じ
（注８） 杉原荘介，大塚初重「甲山町古墳出土の土器」『土師式土器集成－本編２－』1971

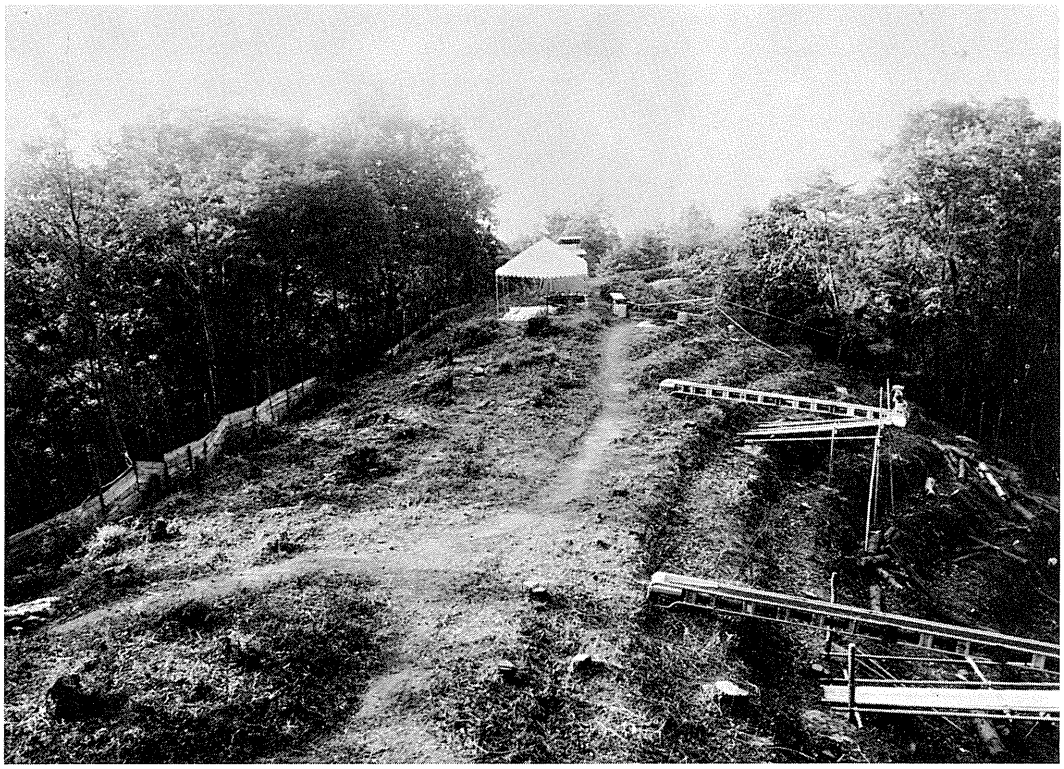
図　　版



a．岡谷遺跡遠景（航空写真）



b．岡谷遺跡全景（航空写真）



a．岡谷遺跡全景（調査前・南から）



b．　同　　上　（調査後・南から）



a．岡谷遺跡第１号竪穴式住居跡（西から）



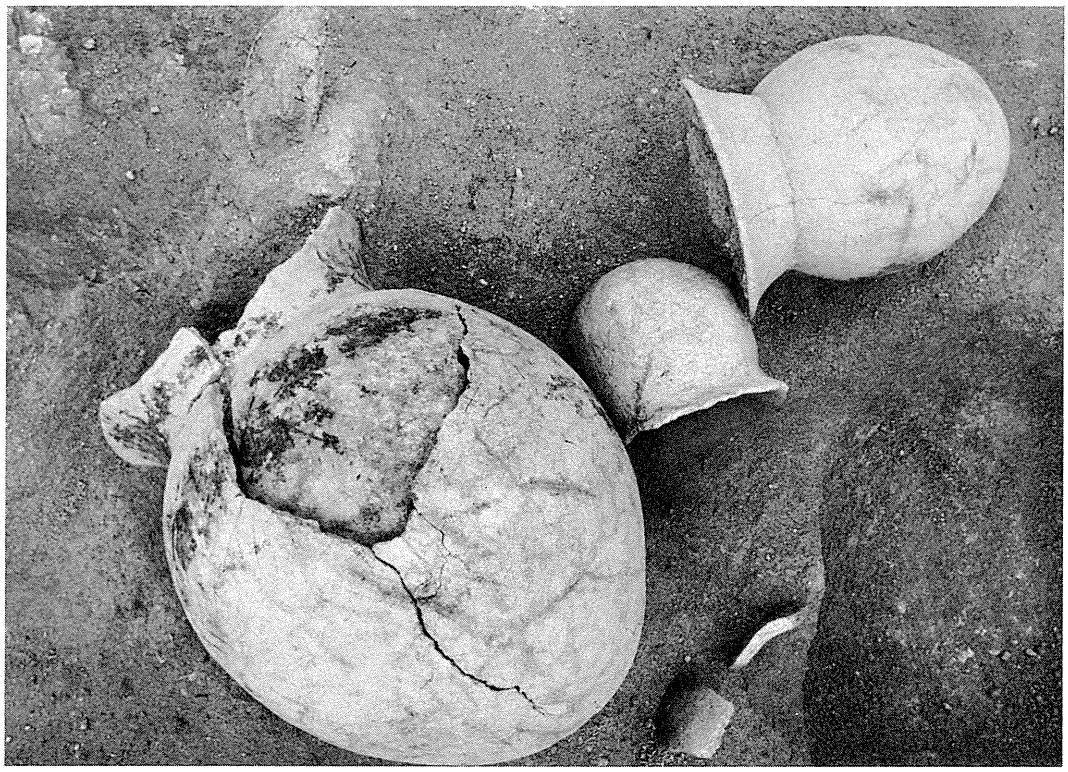
b．　同　　上　（南から）



a．岡谷遺跡第２号竪穴式住居跡（西から）



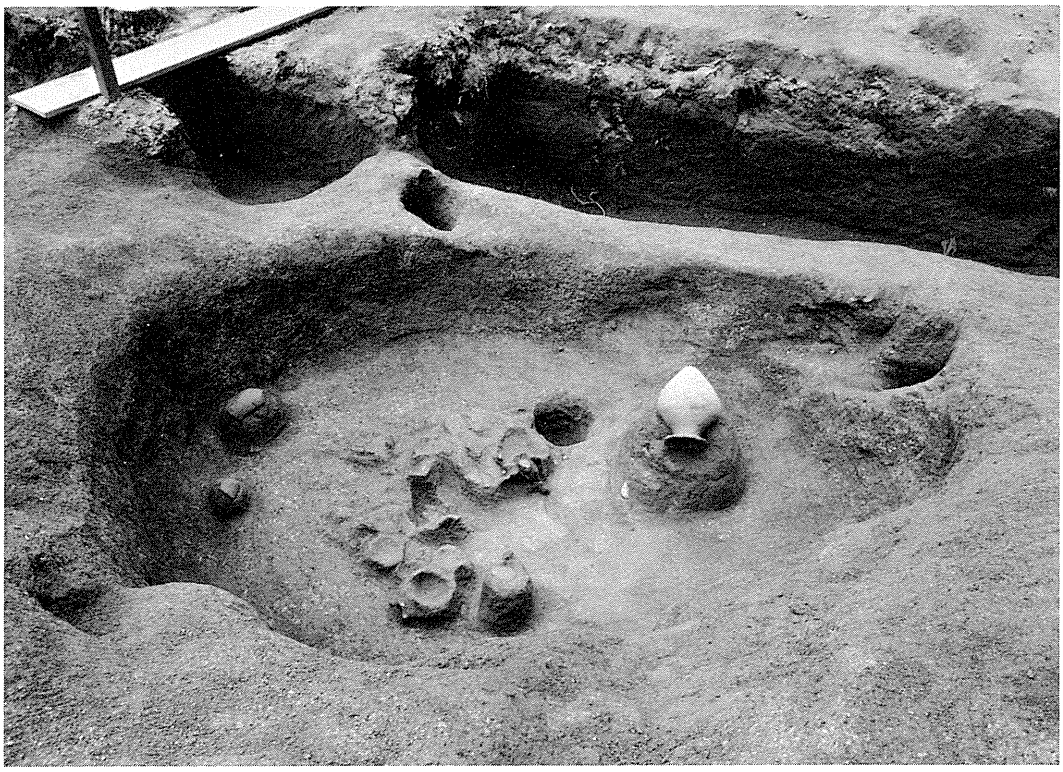
b．　同　　上　（北から）



a．岡谷遺跡第２号竪穴式住居跡内土器出土状況



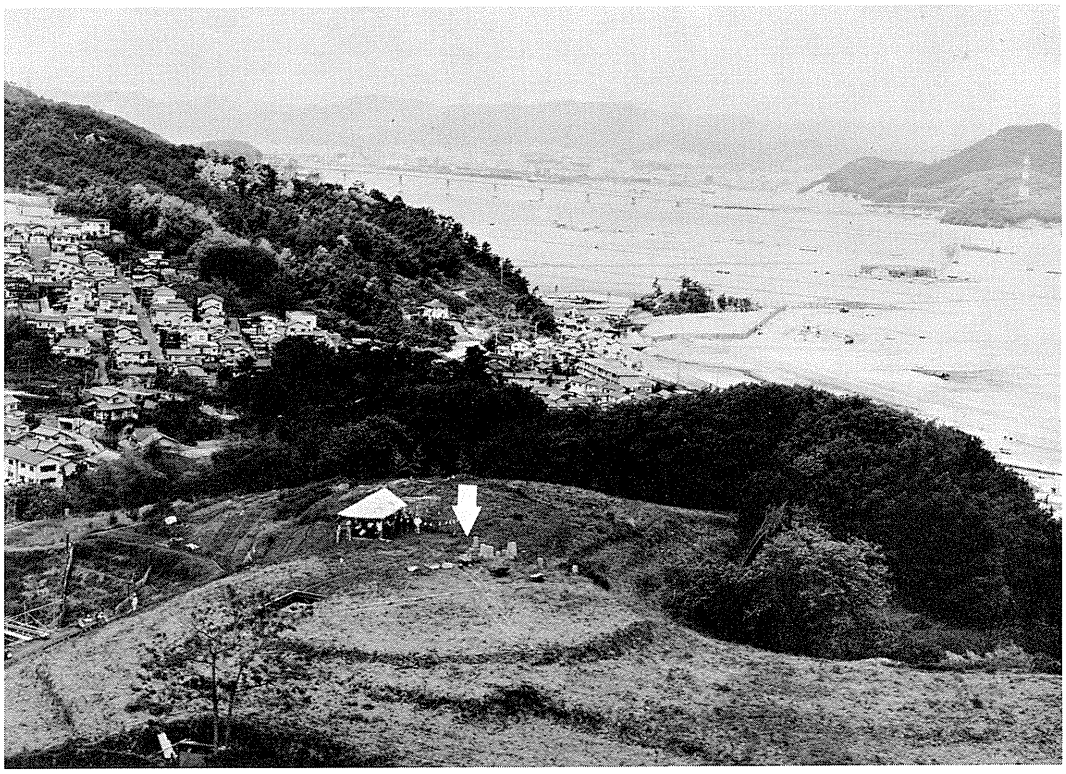
b．岡谷遺跡壷棺出土状況



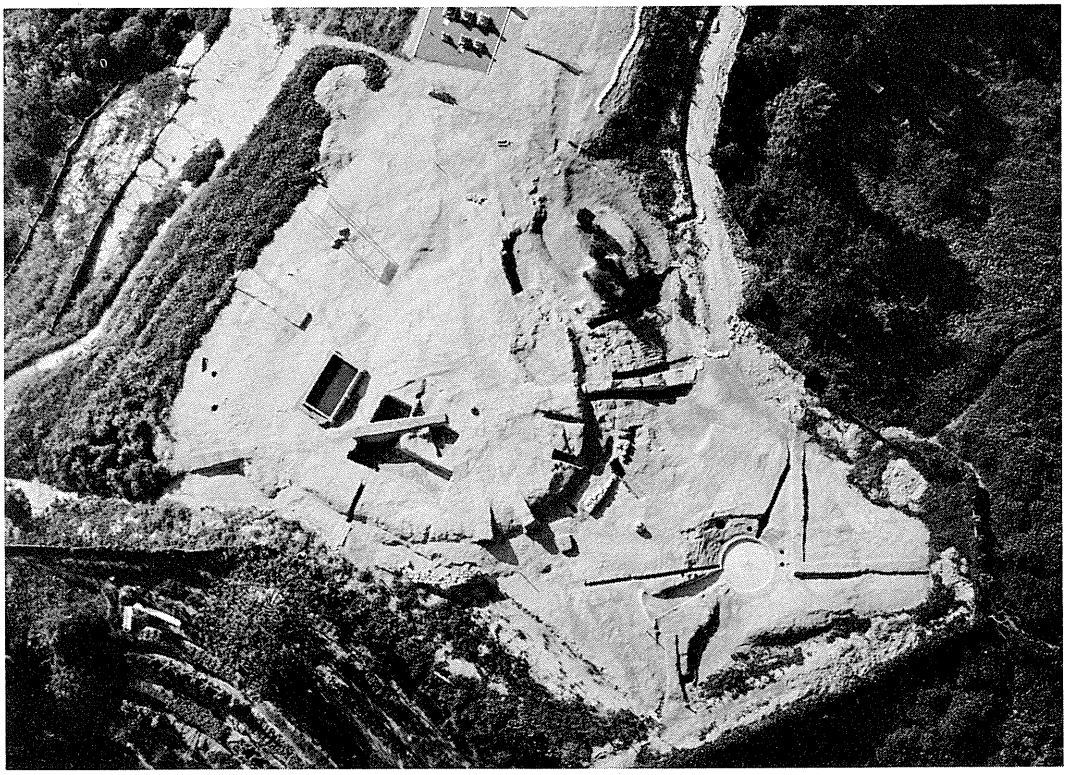
a．岡谷遺跡土壙（西から）



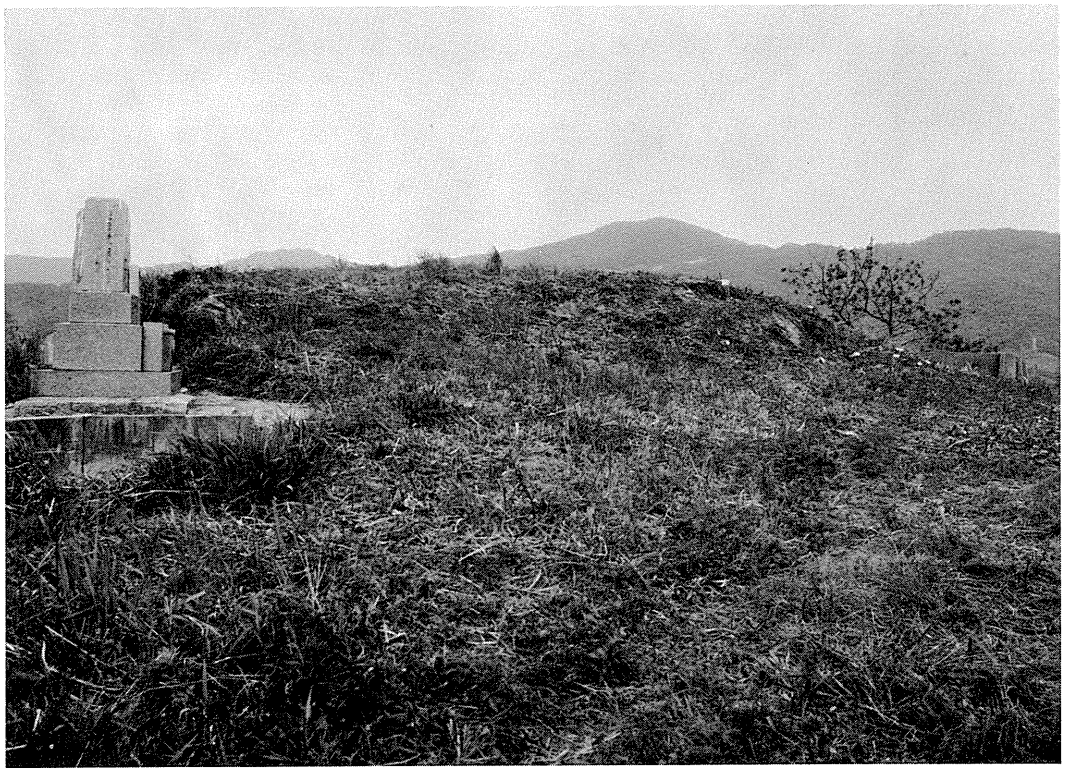
b．　同　　上　（東から）



a．狐が城古墳近景（航空写真）



b．狐が城古墳全景（航空写真）



a．狐が城古墳全景（調査前・西から）



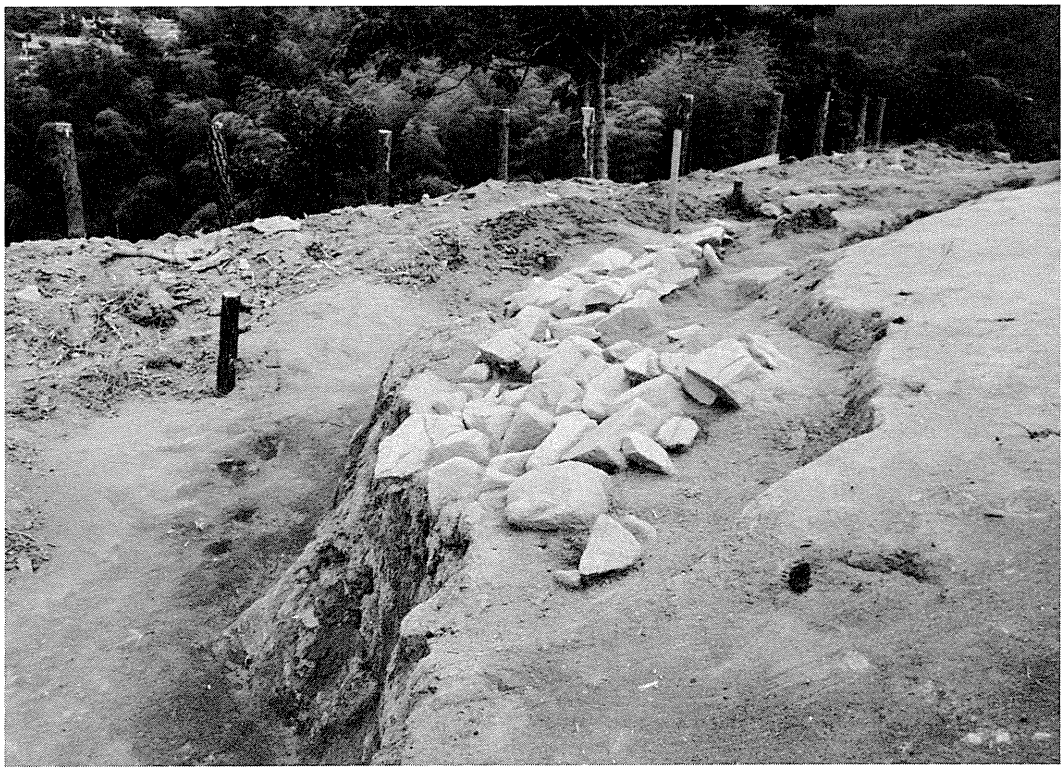
b．　同　　上　（調査後・西から）



a．狐が城古墳石列1（東から）



b．　同　　上　　（西から）



a．狐が城古墳石列1（北から）



b．狐が城古墳石列1上遺物出土状況



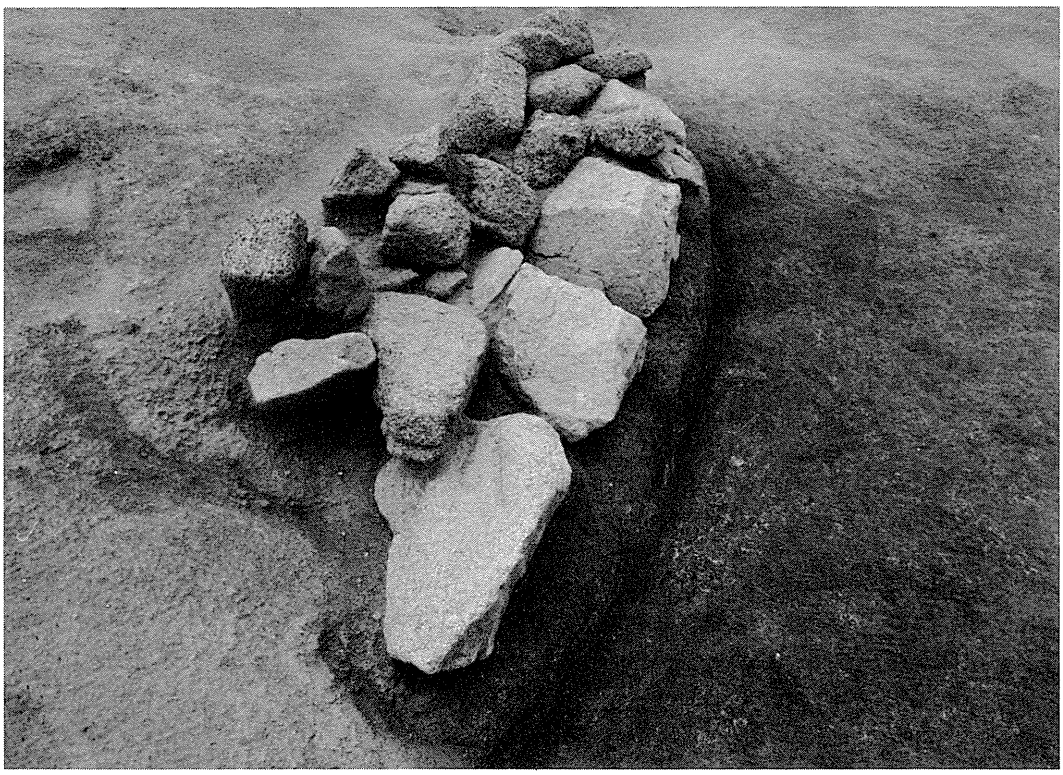
a．狐が城古墳石列２（北から）



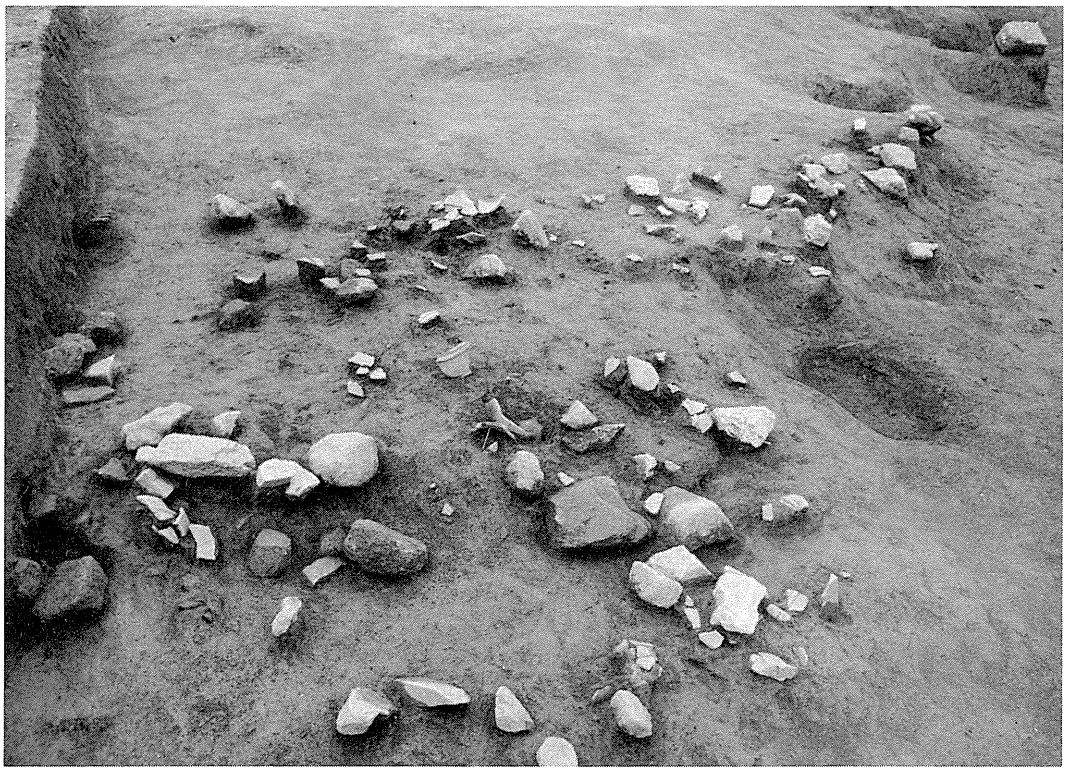
b．　同　　上　（東から）



a. 狐が城古墳石列3（西から）



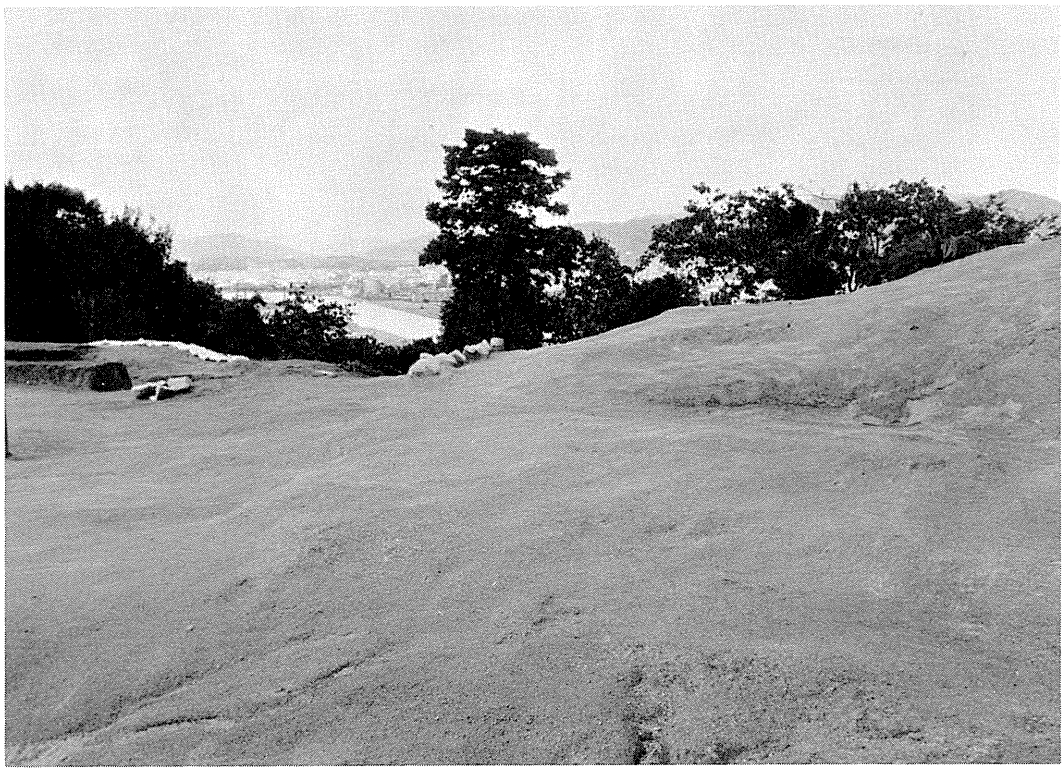
b. 同　　上　（北から）



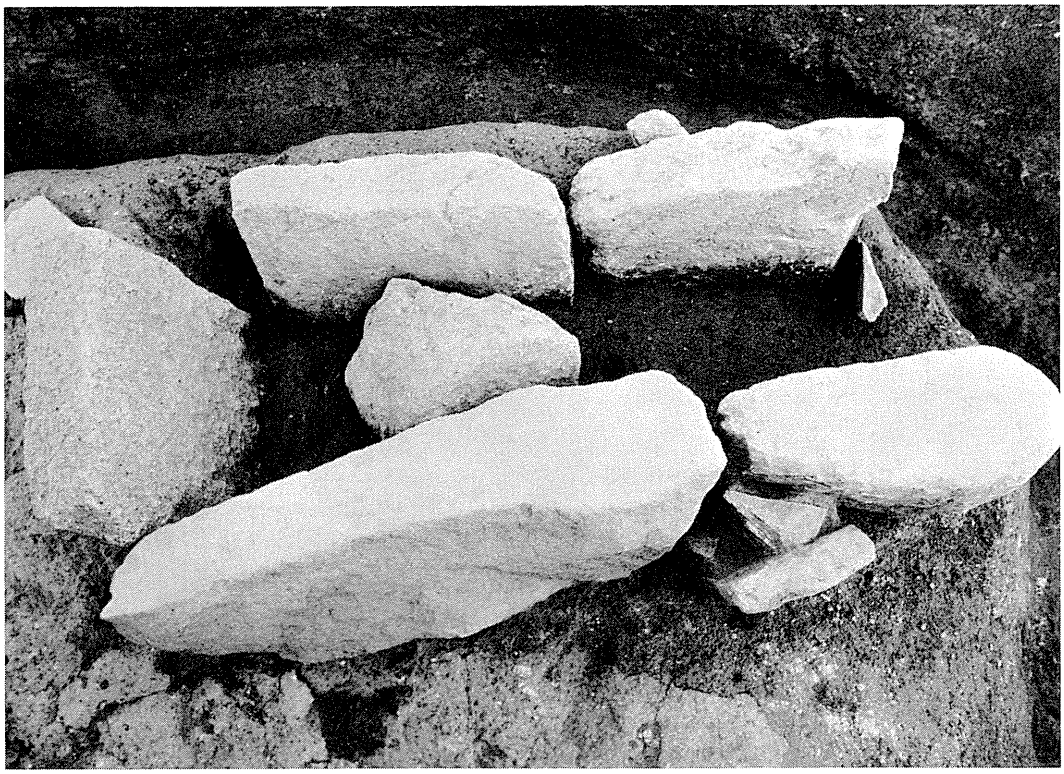
a． 狐が城古墳西側遺物出土状況



b． 狐が城古墳西側形象埴輪及び高坏形土器出土状況



a．狐が城古墳西側斜面（調査後・南から）



b．狐が城古墳石棺（完掘後）



1.（第10図3）



4.（第10図2）



5.（第10図4）



2.（第11図8）

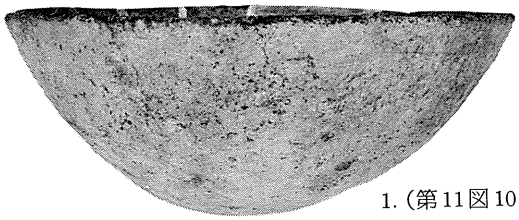


3.（第10図7）

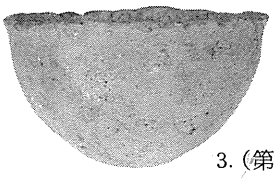


6.（第11図9）

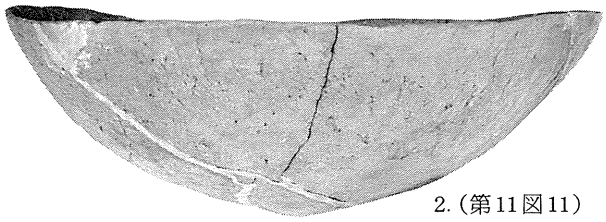
岡谷遺跡第２号竪穴式住居跡内出土土器 (1) ※（　）内は実測図の番号を示す



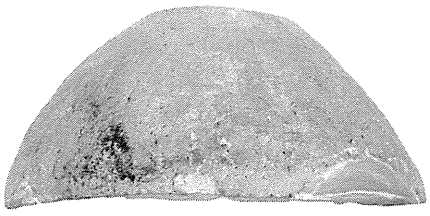
1.（第11図10）



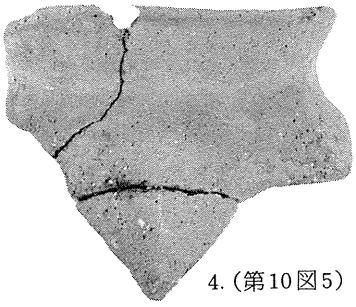
3.（第11図12）



2.（第11図11）



6.（第11図13）



4.（第10図5）

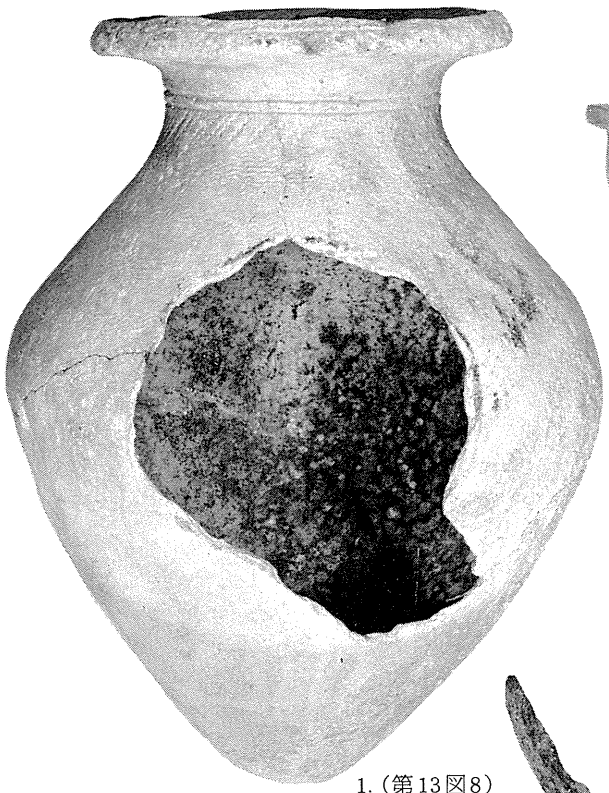


7.（第11図14）

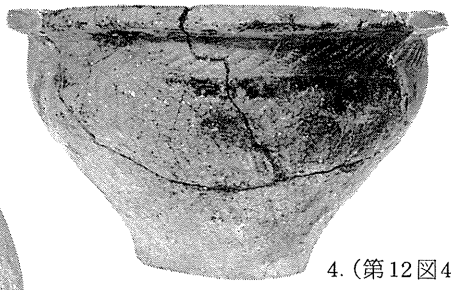


5.（第10図6）

岡谷遺跡第２号竪穴式住居跡内出土土器 (2) ※（　）内は実測図の番号を示す



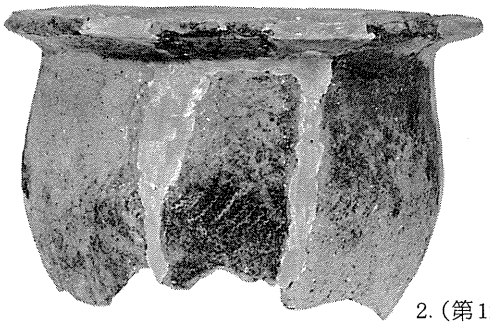
1.（第13図8）



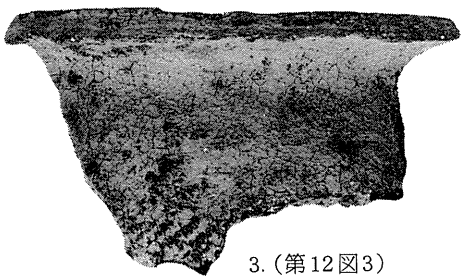
4.（第12図4）



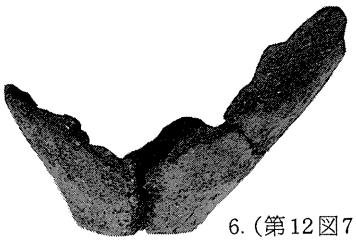
5.（第12図6）



2.（第12図2）

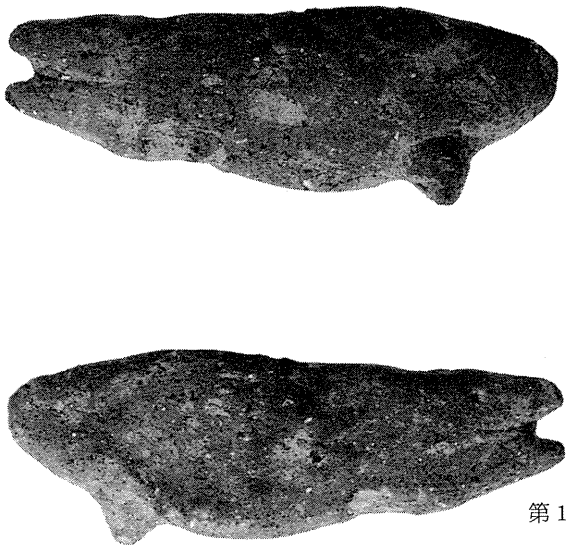


3.（第12図3）



6.（第12図7）

岡谷遺跡土壙内出土土器 ※（　）内は実測図の番号を示す



第 13 図

a． 岡谷遺跡第 2 号竪穴式住居跡内出土土製品（実大）



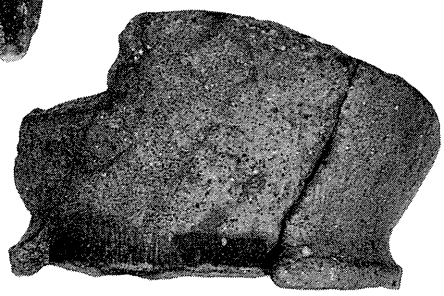
1.（第 14 図）　2.

b． 岡谷遺跡第 2 号竪穴式住居跡内出土砥石及び調査区内出土土器

※（　）内は実測図の番号を示す



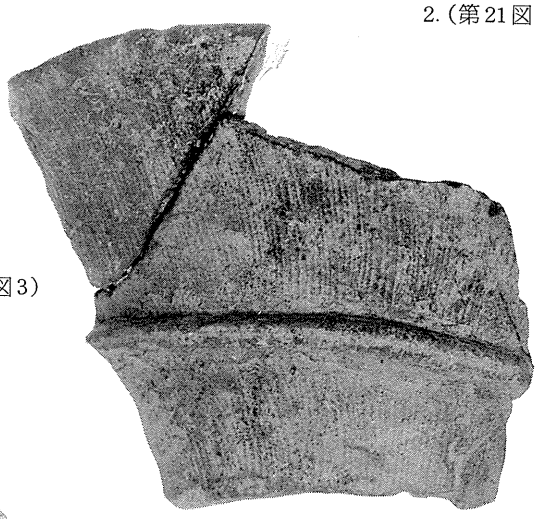
1.（第21図1）



2.（第21図2）



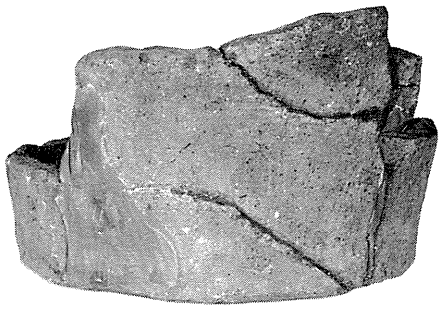
3.（第21図3）



4.（第22図10）

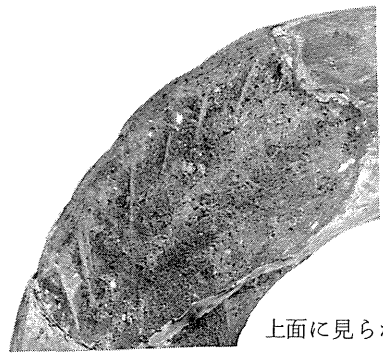


5.（第21図9）



6.（第21図5）

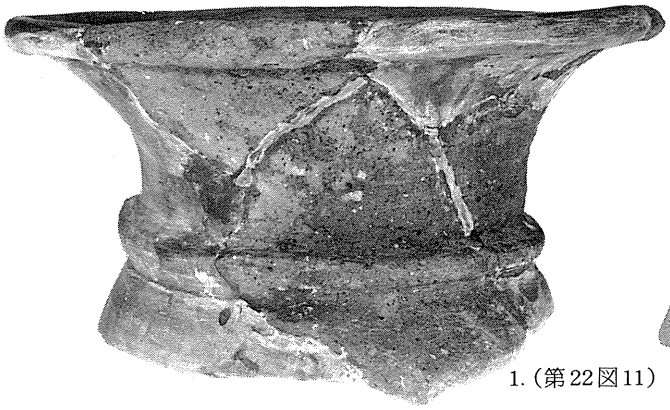
狐が城古墳出土円筒埴輪 (1) ※（　）内は実測図の番号を示す



上面に見られる剝離痕



2.（第21図6）
底面に見られる圧痕



1.（第22図11）

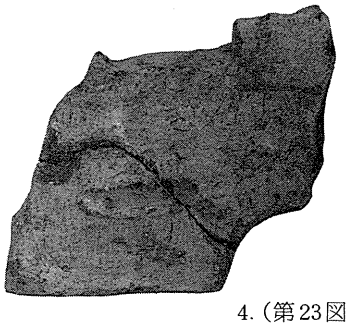


3.（第21図8）

a． 狐が城古墳出土円筒埴輪 (2) ※（ ）内は実測図の番号を示す



1.（第23図1）



4.（第23図2）



2. 破風板



3. 突 帯



5.（第23図3）

b． 狐が城古墳出土形象埴輪及び高坏形土器 ※（ ）内は実測図の番号を示す

広 X4－84－196
広島市の文化財 第31集
広島市安芸区矢野町所在
岡谷遺跡・狐が城古墳発掘調査報告

編　集
発　行　広島市教育委員会社会教育部管理課
広島市中区国泰寺町一丁目4番21号
〒730　TEL (082) 245－2111

発行日　昭和60年3月

印刷所　電子印刷株式会社
広島市中区堺町一丁目1番5号